

偶評
續今體名家文抄

土居光華編輯

第十卷
全部三冊

柳田文庫
文庫11
A1395
4



文庫 11
A1395
4

偶 評



續今體名家文鈔

美作國勝南郡
高西岡氏藏本

柳田泉文庫

美作國勝南郡
高取岡氏藏本

偶評續今體名家文抄序

兩國橋ヲ東西スルモノ。日本橋ヲ南北スルモノ。
淺草橋及ヒ萬世橋ヲ來往スルモノ。新橋ヲ掠メ
停車場ニ駈込^{カケコム}モノ。其ノ男女小長ニ論ナク。其ノ
貴賤貧富ニ論ナク。其ノ風體ノ和洋漢ニ別ナク。
其顏色ノ黃白黒及ビ茶褐色ニ別ナク。車ニ乗ル
モノ。杖ツクモノ。奔ルモノ。緩々歩^{アユ}ムモノニ別ナ
ク。試ニ之ニ其ノ行カント欲ル所ヲ問ヘハ。横濱
ニ行カントカ。本所深川ニ至ラントカ。魚岸ニ用
アリトカ。淺州觀音ニ參詣セントカ。上野ニ遊ビ

明治十年

第九月寶

文閣發兌

博覽會ヲ觀ントカ、何トカ斯トカ、其方向ノアラサルモノナク、其目的ノ立タザルモノナシ。然ルニ、近來書生、更ニ其目的ナク、又其方向ナク、容易ニ書ヲ著シ、忽卒ニ之ヲ刊行ス、甚レキハ、一人ノ身、一月ノ間、數回數種ノ書ヲ發兌スルモノアリ、殆ント書物屋ノ下職シタレヨク草稿賣捌サウカウウリサキ所ト云爾スル如ク、其見實ニ童幼婦女ノ淺草參リニ、如カサルナリ。世間此等靦顏ノ徒、多キヲ以テ、世人著作ヲ見ルルト甚タ賤ク、以テ賣名ノ具トナサバ、以テ射利ノ料トナシ、敢テ唾棄シテ、顧ミザラントス。

故ニ余今般此ノ處ニ於テ、聊カ余カ平生ノ所見ヲ述ベ余ノ此編ヲ選スル、目的方向ヲ讀者ニ告ントス。却說余ノ此篇ヲ撰シ、廣ク當今天下ノ人物ニ於テセズ、多ク諸大家、諸縉紳ニ於テスルモノハ、決シテ其名聲ヲ假リ、一世ヲ炫耀セント欲スルニアラズ、所謂精金美玉、市定價アルニ從フト、小年子弟ノ正鵠ヲ示スモノニシテ、強ニ明治天下ノ文章、是ニ盡クト云フニ非ザルナリ、又多ク、賞揚ノ評ヲ加ヘシモノハ、決シテ諸大家諸縉紳ニ、諂媚スルニ非ザルナリ、其文ノ賞揚スベキ

新全集名家文抄序
ニ足ルモノヲ撰シテ、其評ヲ加ヘシナリ。猶ホ人ノ林泉ニ遊フモノ、雜草惡木ハ、睨シテ過キ、美花清泉ニ値ヘハ、激賞スル如シ。且又多ク今人ニ於テシテ、古人ニ於テセザルモノハ、今人ノ文ヲ讀ムハ、古人ノ文ヲ讀ムヨリ、彼ノ開明ト、發達ニ於テ、切。且實ナルノミナラズ、誦讀ノ際、今日學者ト稱セラル、人ノ言フ所、此ノ如クニシテ、如何ナル事業ヲナシ、今日官吏ト稱セラル、人ノ論スル所、此ノ如クニシテ、如何ナル爵位ヲ有スト云フヲ、知ラシメ、彼モ人ナリ、我モ人ナリ、ト自己ノ

智識ヲ發シ、世道ノ上進ヲ圖ラントヨ希フナリ。是余カ此編ヲ作ル第一ノ目的ナリ。然ルニ、猶ホ一ツ、茲ニ、余カ、讀者ノ爲ニ述ベザルヲ得サル者アリ、近來我邦、人情倖薄、官途熱中ノ人、夥多ナルヨリ、首ヲ青雲ニ回ラシ、目ヲ金帽ニ注キ、讀書ノ精神ヲ、十分ノ九ハ、官邊政事ノ点ニ置キ、他ノ貿易、通商、究理、發明、經濟等ノ点ニ留メス。故ニ新聞雜誌ノ、社論ヨリ、諸方ノ投書ニ至ル迄、皆彼ノ官邊政事ノ上ニアツテ、更ニ、其他貴重ノ諸學課ニ及バズ、著書モ、官吏ノ題字序文ヲ以テ嚮カント

ヲ謀リ、詩文モ、官吏ノ名前ヲ借テ、沽ント計ルニ
至ル、要之、日本三千五百萬人、大抵官途熱中ノ奴
隸ノ如シ、其卑屈、已ニ此ノ如シ、其自カラ、侮ヲ政
府ニ受ク、亦宜ナラズヤ、今、此篇、大家縉紳ノ兩端
ニ在リト雖、余カ本意ハ、全ク學者先生ノ説ヲ
弘張スルニアルナリ、願クハ、此編ヲ讀ムモノ、此
編ヲ以テ、官吏文抄視スルナク、學者文抄視シ、眼
光ヲ官吏ノ頭上ニ放ツナク、學者ノ頭上ニ放タ
ントヲ、今、一口ニ之ヲ言ヘハ、西先生ヲ見ルニハ、
其ノ東京上等裁判所長ノ巍々ヲ見ルナク、只一

箇ノ西先生ヲ見、神田先生ヲ見ルニハ、其ノ文
部少輔ノ堂々ヲ見ルナク、只一箇ノ神田孝平先
生ヲ見ルベシ、是、余カ、此篇ヲ作ル、第二ノ目的ニ
シテ、最モ讀者ニ希望スル所ナリ、明治十年九月
三日一品花樓主人杜居光華識

Table with multiple columns and rows, containing faint text entries, likely a detailed index or list of contents.

偶評續今體名家文抄目錄

卷之一

大政奉還ノ後事ヲ論ズル書	徳川 慶喜
遷都ノ議	大久保利通
王師征討ノ非ヲ諫ルノ書	伊達 慶邦
大總督府ニ上ル書	勝 安芳
再ビ大總督府ニ上ル書	全
天皇陛下ニ上ル書	津田 真道
蝦夷地ヲ乞ヒ徳川家舊臣ヲ撫育セン	ノ
ヲ乞ノ書	榎本 武揚

續今體名家文抄目錄

朝典ヲ改メ外人ノ參内ヲ允サントラ乞
ノ書 松平 慶永

山内 豊信

毛利 元敏

島津 忠義

淺野 茂長

細川 謹久

華士平民ノ族ヲ立ントラ論ズル議

福岡 孝悌

板垣 退助

國債證書ヲ作り華士族ノ祿ヲ廢セント

蜂須賀茂昭

ヲ論ズルノ議 大藏理財修整ノ為米利堅ニ航行セント

伊藤 博文

陸奥 宗光

ヲ乞ノ書 辭職ヲ請フノ表

福澤 諭吉

官費生徒ヲ廢スルハ國家文運ニ害アル

井上 馨

澁澤 榮一

明治八年十月十二日ノ上表 板垣 退助

明治八年十月十九日ノ上表 島津 久光

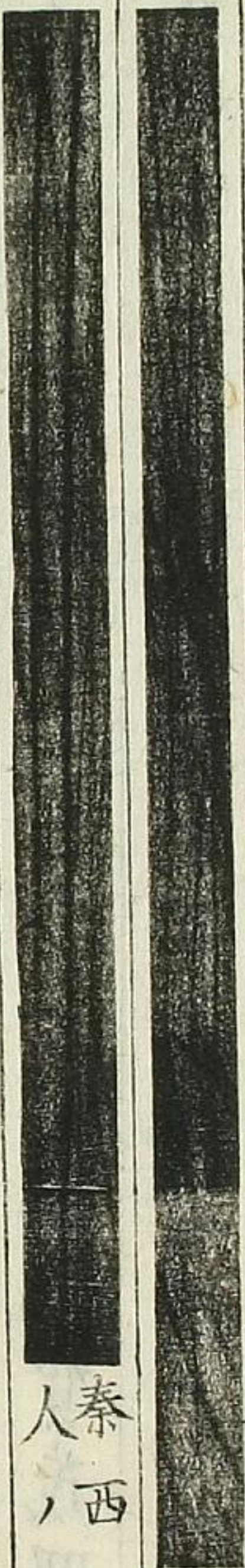
以上三首故アリテ録セズ

麿島縣令大山綱良ニ答ル文 西郷 隆盛

征討總督ニ品親王有栖川親仁ニ上リ博

愛社設立ヲ乞フ書 大給 恆

佐野 常民



秦西人

中村 正直

上書ニ據
又原漢文

入補

版籍返上ノ表

島津 忠義

毛利 元敏

鍋島 直大

山内 豐範

卷之二

出板自由ナラレト望ム論 津田 真道

夫婦同權ノ流弊論ニ 加藤 弘之

夫婦有別論 津田 真道

脩身治國非二途論 西村 茂樹

想像論

津田 真道

國民氣風論

西 周

人ノ説ヲ答ム可ラザルノ論

福澤 諭吉

神國論

陸奥 宗光

時勢論

桐野 利秋

拷問論

津田 真道

拷問論ノ二

全

死刑論

全

卷之三

人心一致ノ説

神田 孝平

世ノ富ハ良友ヨリ大ナルハ無キノ説

中村 正直

賊説

西村 茂樹

秘密説

西 周

善良ナル母ヲ造ル説

中村 正直

國樂ヲ振興スベキノ説

神田 孝平

地震説

津田 真道

天理人道

福澤 諭吉

舊發明ノ器械

全

卷之四

工業新報緒言

大鳥 圭介

民間雜誌發端

福澤 諭吉

憲法類編緒言

江藤 新平

福岡 孝悌

楠田 英世

英國議院章程序 原漢文

細川潤次郎

會社辨叙

澁澤 榮一

人間交法總論

免玉淳一郎

各國年鑑序 原漢文

中村 正直

博物新編補遺序 大十八 小幡篤次郎

修身論序 原漢文

中村 正直

輿地誌略叙 原漢文

秋月 種樹

米利堅志序 原漢文

中村 正直

治罪要録序 原漢文

玉乃 世履

顯承述略序 原漢文

重野 安繹

卷之五

農ニ告ル文

福澤 諭吉

學問ヲ勸ムル文

全

大槻磐水先生ヲ祭ル文

全

明治十年一月一日ノ文

全

文會演說

阪谷素

白河樂翁公ノ遺事

依田百川

通計六十首

内三首
録セズ

目錄畢

偶評續今體名家文抄卷之一

土居光華編選

◎◎大政奉還ノ後事ヲ論ズル書

徳川慶喜

臣慶喜不肖ノ身ヲ以テ、無踰ノ寵恩ヲ蒙リ、恐感
 悚戴ノ至ニ任ヘズ、爾來夙夜、黽勉寢食ヲ安ンゼ
 ズ。苦心焦慮、以テ宇内ノ形勢ヲ察シ、大政ヲ奉還
 ス。其意以為ク政權ヲ一途ニ歸シ、以テ天下ノ公
 議ヲ盡シ、萬國并立ノ皇基ヲ建テ、以テ國威ヲ海

堯舜和聖類
 ノ亞流源烈
 公ノ子タルニ
 耻ヂズ

論願ル文明
ニ過ダ

企望太ダ可

外ニ輝サン。今日ノ急務ナリト。是レ祖宗二百
年來、繼承ハ大權ヲ私セズ、斷然奉還ハ舉アル所
以ナリ。當時烈藩未ダ合同セズ、廷議未ダ定ラズ。
因テ其乞ヲ許サレズ、猶ホ其職ヲ奉ズ。然ルニ臣
慶喜鄙衷獨リ以為ク、方今國家ノ形勢日ニ危急
ノ域ニ迫ル。宜ク早ク列藩ト同心戮力、天下ハ公
議輿論ヲ採リ、以テ大公至平ノ國是ヲ定メ、皇基
ヲ維持鞏固ナラシムベシト。日夕天救アリ、以テ
這ノ會議ヲ開カン。一ヲ企望ス。豈ニ圖ランヤ。此
間右等顛末更ニ旨令モ之レナク、又在京列藩ノ

公能ク宇内
ノ形勢ヲ察
シ諸藩ノ形
勢ヲ察スル
能ハズ。是レ
此ノ敗失ヲ
取ル所以ナ
リ。然ニ此敗
失ハ公ノ美
事
三先帝ノ宇
下ニ得テ妙
諸葛孔明出
師表ノ工夫
昔日ノ通逃
今日ノ大臣
人世ノ變轉
亦知ルベカラ
ザルナリ

衆ニモ詢ラズ、俄然一兩藩戎裝ヲ著シ、宮闕ヲ擁
護シ、國家未曾有のノ大改革ヲ發シ、刺エ先帝親
任遺托ハ攝政殿下ハ重職ヲ停シ、先帝眷顧ハ公
卿ヲ擯斥シ、遠ニ先帝放逐ハ通逃ヲ還復シ、倍臣
ハ輩ヲノ猥リニ玉階ニ接近徘徊使メ、皇國數千
年來ハ朝典ヲ汚蔑ス、其餘今日一切ノ旨趣、昔日
臣慶喜大政奉還ノ日、陛下云々スル所ト、霄壤反
覆、寔ニ驚愕啗嗟ニ堪ヘズ。是レ陛下ハ聖斷ニ出
ザル、明々白白々、縱令聖斷ニ出ルモ、臣慶喜固ヨ
リ將ニ一言ヲ獻ゼハトス。況ンヤ陛下勿冲踐祚

言ハシ
豊
人
三

嗚呼一振文
大ニ情アリ

外國交際扱
ミ來テ切是
上書人ヲ動
カス處

猶淺シ安ンゾ能ク此等非常ハ大事ヲ發シ輕々
之ヲ行フハ理アラシヤ嗚呼天下鼎沸萬民塗炭
臣慶喜盡ス所ハ微衷獨リ水泡ニ歸スルハミナ
ラズ金匱無缺ハ皇統亦將ニ何如トモスベカラ
ザルハ勢ニ至ラントス殊更外國交際ハ皇國一
體ニ關係スル所ニシテ所謂國家重大ハ事件ナ
リ僥倖ハ新任倍臣ノ輩萬一聖斷ヲ矯ハ一時ハ
陋見ヲ以テ此ハ如キ重事ヲモ猶ホ處置決定シ
若シ其當ヲ失フゴトキハ信義ヲ外國ニ失シ忽
チ國家顛覆ハ患ヲ招ク亦知ル可カラザルナリ

先帝云々前
從照應

而ノ二字幹
旋カアリ
處置亦可

一正一奸誰
カ烏ノ雌雄
ヲ知ラレ

誠ニ此ハ如クナレバ内憂外患併セ至ルナリ是
レ臣慶喜ハ最モ憂慮スル所ニシテ陛下ハ為ニ
盡言スル所以ナリ願クハ朝廷事大小トナク先
帝ノ遺意ニ依據シ前日出ス所ノ聖言ニ歸リ萬
事從前ノ舊ニ依リ而メ臣慶喜前ニ建議スル所
ノ如ク廣ク天下列藩ノ衆議ヲ盡シ公明正大ノ
理由ヲ以テ正ヲ舉ゲ奸ヲ退ケ萬世不朽ノ皇基
ヲ立テ上ハ先帝在天ノ靈ニ答ヘ陛下ノ宸襟ヲ
安ジ奉リ下ハ天下萬民ヲ保ゼレト臣慶喜懇願
激切ノ至ニ任ヘズ十二月某日臣慶喜頓首謹言

讀ハシ
三

○○遷都ノ議

大久保 利通

日本ノ開化
思想外ニ出
ルモノ多シ
維新ノ始メ
浪華遷都ヲ
以テ一大難
事トナス而
ノ都ニ東
都ニ遷ルヒ
ノ百三十里
其餘廢藩置
縣文武事業
實ニ意外ニ
進歩スルモ
アリ只氏
選議院ノ一
事頗ル年ヲ
連テ却退ノ

今日ノ如キ大變態ハ、開闢以來未ダ曾テ有ラザ
ル所ナリ。然ルニ尋常定格ヲ以テ、豈ニ之ニ應ズ
ベケレヤ。今一戰官軍勝利トナリ、巨賊東走スト
雖モ、巢穴未ダ鎮定ニ至ラズ、各國交際未ダ永續
ハ法成リ立タズ、列藩離叛方向未ダ定マラズ、人
心洶々、百事紛紜トシテ、復古ノ鴻業未ダ其半ニ
至ラズ、纔ニ其端ヲ開キタル者ト謂フベシ。然レ
バ、朝廷ニ於テ、一時ノ利徳ヲ計リ、永久治安ノ
策ヲナサル時ハ、則此條ノ後ニ足利ヲ生ジ、前

色ノ見ハス
ヲ覺フハ何
ゾヤ

三未ダ字下
得安勢アリ

是和漢歷代
英主少ナク
シテ奸臣多
キ所以

姦去テ而メ後奸来ルノ、覆轍ヲ踏セラレ候モ、亦
圖ル可カラザルナリ。依テ深ク天下ニ注目シ、觸
視スル所ノ形跡ニ拘ラズ、廣ク宇内ノ大勢ヲ洞
察シ、數百年來、一塊シタル因循ノ弊ヲ一新シ、國
内同心合體、一天ノ主ト申モノハ、斯マデ頼モシ
キモノト上下一貫、天下萬民感動泣涕致シ候程
ノ御實行ヲ、舉行ハレシ事實ニ、今日急務ナリ、舊
來ノ如ク主上ト申奉ルモノハ、玉簾ノ内ニ在シ、
人間ニ替ラセ玉フノ形情ヲ飾リ、僅ニ限リアル、
公卿ノ外龍顏ヲ拜シ奉ル事ノナラザル様成シ

來り候テハ、民ノ父母タル、天賦ノ御職掌ニハ、背
戾シ甚以其謂レナキノ至リナレバ、其御根本道
理ニ適當シタル御職掌之アリ、初テ内國事務ノ
法起ルベシ、右ノ根本ヲ推究シテ大變革セラル
ベキハ、遷都ノ典ヲ舉ゲラル、ニ在ルベシ、何ト
ナレバ弊習ト云ヘルハ、理ニ非ズシテ勢ニ在リ、
勢ハ觸視スル所ノ形跡ニ歸スベシ、今其形跡上
ノ一二ヲ論ゼンニ、龍顏ハ拜シ難キ物ニ譬ヘ、
玉體ハ寸地モ踏玉ハザルモノト、餘リニ推尊シ
奉リテ、自ラ分外ニ尊大高貴ナルモノ、様ニ思

大活眼

餘リニ云々
斟酌アリ歟

夫レ一轉老
儒ノ言ニ似
タリ

召サレ、終ニ上下隔絶シテ其形情今日ノ弊習ト
ナリシモノナリ、夫レ敬上愛下ハ、人倫美事、然ル
ニ過レバ君道ヲ失ハシメ、臣道ヲ失ハシムル害
アルベシ、臣聞當今各國ノ帝王從者一二ヲ率ヒ、
テ國中ヲ行歩シ萬民ヲ撫育シ、曾テ威儀鄭重我
邦ノ如クナラズ、實ニ君道ヲ行ハ者ト言ハ可シ、
然レバ更始一新王政復古ノ今日ニ當リ、本朝ノ
聖時ニ法ラセ外國良政ヲ歷ス可キ基本ヲ開ク
ハ、先ヅ遷都ノ大英斷ニ在ルベシ、乃チ是ハ一新
ハ、機會トシテ、萬事易簡輕便ヲ本トシ、數種ハ大

乃チノ字ヲ
以テ忽チ正
意ニ入ル歟甚

再東

外國交際ノ
道富國強兵
ノ術攻守ノ
大權ヲ取ル
一海陸軍ヲ
起ス一凡ソ
四事

弊ヲ拔キ、民ノ父母タル天職ノ君道ヲ履行セラレ、命令一タビ下リ、天下慄動スル所ノ大基礎ヲ確立シ、皇威ヲ海外ニ輝シ、萬國ニ御對峙アラセラレン。實ニ、所謂急務中ノ最急務ナリ。遷都ノ地ハ浪華ニ如クモノナシ。暫ク行在ヲ定メラレ、治安ノ體ヲ一途ニ居エ、大ニ成ス事アルベシ。外國交際ノ道富國強兵ノ術攻守ノ大權ヲ取ル一海陸軍ヲ起ス事ニ於テ、地形尤モ適當ナルベシ。是國內事務ノ大根本ニシテ今日寸刻モ怠ルベカラザルノ急務ト存シ奉リ候。此義行ハレテ内政

氣豪ニシテ
筆粗闊ハガ
而シテ英雄豪
傑ノ文ヲルヲ
知ル

雄篇大作只
其ノ文章整
正法アルノ
ミナラズ老
謀深遠整
少年輩ノ造
シ得レ一考ニ

ノ軸立チ、百事始テ舉行フベシ。若シ眼前些少ハ故障ヲ懸念シ、因循機ヲ愆リ候ハ、皇國ノ大事終ニ去ルベシ。仰ギ願ハカハ、大活眼ヲ以テ一決斷然急率ノ御旅行アラント。千祈萬禱奉リ候。大久保市藏恐懼謹言。

◎◎王師征討ノ非ヲ諫ルノ書

伊達慶邦

德川慶喜、叛逆ニ就テ、追討トシテ、近日官軍東海東山北陸三道ヨリ、進發セシム可キ旨仰セ出ラレ候ニ付テハ、奥羽ノ諸藩宜ク尊王ノ大義ヲ知

非ハ蓋シ
漢老人ノ手
ニ出ルナラン

夫レ然リ
其レ然ラン

リ相共ニ謀援六師征討ノ決旨御令ノ趣御書ヲ
以テ仰セ渡サレ猶又會津容保此度徳川慶喜ノ
叛逆ニ與シ錦旗へ砲發大逆無道征伐ノ軍ヲ發
セラル可ク候間臣慶邦一手ヲ以テ本城襲撃速
ニ追討ノ切ヲ奏ス可キ旨御旨令ノ趣謹テ奉畏
候若松ハ東北ハ一孤ト雖モ臣慶邦一手ニ襲撃
仰セ付ラレ候段武門ハ面目ニモ叶ヒ有リ難ク
存ジ奉リ候速ニ一藩中ニ布告出陣ノ用意仕リ
官軍御進發ノ期ニハ速ニ應接襲撃仕ル可候處
弊藩奥海ハ濱ニ僻在仕リ道路遼遠朝廷御決議

真偽虚實
一句是レ一
篇ノ髓腦

ハ御深旨モ詳細辨ジ奉ラズ畿内上國ノ形勢等
唯々傳聞而已真偽虚實明白決シ難ク固陋一隅
ノ見ヲ以テ言上仕リ候儀千萬恐悚ノ至ニ存ジ
奉リ候へ共既ニ廣ク言路ヲ開カセラレ候上ハ
存付ハ次第黙止居リ候テハ臣子ハ分盡シ難ク
忌諱ヲ顧ミズ言上仕リ候王政復古朝議御一新
ノ折柄一旦天下ノ兵ヲ動カサレ關東御征伐在
ラセラレ候段ハ恐レナガラ重大ノ事件深キ慮
慮モ在ラセラレ候上下ハ存ジ奉リ候へ共天下
ノ人心歸著仕リ候事ニ之レナク候テハ成セラ

吉貞ノ禮
七

炮烟硝霧天
地眠マノ際
豈區々發炮
先後ヲ以テ
名義ノ正邪
ヲ問フベケ
ンヤ只勝敗
如何ニ在ル
ノミ古今然
リ

レガタク、然ルニ先達テ御用在セラレ參内仕ル
ベキ旨御旨令ニ付會桑等先手ニ仕リ上京仕候
中途、右兩藩ヨリ官軍ニ砲發仕リ候ハ、叛逆紛レ
ナシ大逆無道ノ朝敵ニ付、追討將軍ヲ以テ、御征
討在セラレ候趣御布告ニ相成リ候處、臣下等布
告ノ趣ニテハ、先手ノ者門へ差掛リ候節、俄ニ薩
藩勢ヨリ、砲發ニ及ビ止ヲ得ズ争鬪ニ至リ候由
ニ之レアリ、如何ニモ倉卒紛擾ノ間、砲發イッ
カ先、孰レカ後分明相辨ゼズ、風聞モ之レアリ、臣
慶邦御旨令ノ趣ヲ疑ヒ奉リ慶喜布告ノ旨ヲ信

第一條

ジ候ニハ曾テ之レナク候得共、發砲前後判然相
辨ゼザルヨリ、人心疑惑十ニ八九ハ之レアルハ
シ、是レ人心一定仕ラザルハ一條ニ候、徳川祖先
數百年ノ禍亂ヲ定メ、撥亂反正、大勲勞ハ、今更申
上候マデモ之レナク、累世偃武修文海内ヲ鎮靜
仕候事、既ニ二百餘年ノ久キニ及ビ、運澆季ニ屬
シ武威漸ク振ハズ、遂ニ嘉永癸丑年以來外夷陸
續紛至、人心騷然、其間ニハ、幕府處置宜ヲ得ズ、失
體不當ノ儀少ナカラズ候ヘ共、今日ニ至リ、既ニ
政令一ニ歸シ、公平正大ノ旨ヲ以テ皇國ヲ安シ

續今體家文抄卷之一
八

第三條

兵ハ凶器今
人知ラザル
如シ

ジ奉ラシガ為ニ、政權ヲ朝廷ニ奉歸候上ハ、又何
事ヲ企望仕リ朝廷ニ背クベキヤト人心ハ疑惑
十ニ八九ハ之レアリ、是人心一定仕ラザルニ條
ニ候、方今王政復古、紀綱一新萬民刮目ノ聖運ニ
相當ラレ、繼天立極、萬民無窮ノ御大策建サセラ
レ誠ニ民ヲ親ム赤子ノ如ク、民ノ朝廷ヲ仰グ又
父母ノ如ク、一夫其所ヲ得ザル者ナキヲ欽慕仕
リ候折柄、一朝海内ハ兵ヲ動カサレ、無辜ハ萬民
ヲ水火塗炭ノ苦ニ陷レ候段、可哀可憐ハ至、必ズ
幼帝ハ聖慮ニ出ラハ候ニハ之アル間敷ト、人心

第三條

第四條

ハ疑惑十ニ八九ハ之レアル、是人心一定仕
ラザルニ條、慶喜既ニ退去仕リ候後、泰然不
動、恭順罷リアリ候由、然ルニ、先年毛利大膳大夫
家來共、闕下ニ於テ砲發仕候段ハ、一時率爾ノ過
誤、一旦朝敵ノ汚名ヲ蒙リ候へ共、真情實意、明白
ニ相顯ハレ候上ハ、寛大ノ御仁恕ヲ以テ、官位復
故、入京御免成シ下サレ候御議トテモ、一旦祖先
ノ大功ヲ棄テラレズ、徒ラニ發砲ノ前後ヲ以テ、
叛名ヲ定メラレ候テハ、諸藩ノ心服ハ、勿論、下賤
民ニ至ル迄感服ハ仕リ間敷、人心ハ疑惑十ニ八

讀入禮名體名家文抄卷之一
九

抑ヲ以テ一
點尤其筆力
雄健ヲ見ル

層更ニ妙

九ハ之レアルベシ。是人心一定仕ラザル四條ニ
候。抑又外夷御交通ノ儀追々御多端ニ相ヒ成リ
當今既ニ十餘國ニモ相及フ。此時ニ當テ一旦天
下ノ兵ヲ動シ四海鼎沸ノ勢ニ至リ候テハ彼等
ト雖モ必ズ座シテ傍觀ハ仕ル間敷各國帝王ハ
指揮ヲ受ケ如何ナル舉動ニ及ビ候モ計リガタ
シ。然ル時ハ御國辱ヲ宇内ノ萬國ニ流サレ候姿
ニモ相成リ人心ノ疑惑ノミナラズ寒心杞憂痛
哭仕候者又十ニ八九ハ之レアルベシ。是人心一
定仕ラザル五條ニ候。彼是ヲ以テ深思熟慮仕リ

候ニ朝廷ヨリ出師追討ノ儀暫ク御用捨在セ
ラレ慶喜等御譴責之儀廣ク諸藩ノ論定ヲ盡シ
天下ト共ニ正大公明無偏無黨ノ公論ニ歸ン候
御處置在セラレ候ハ必シモ六師ヲ勞セズ彼
自ラ服從仕ルベク此段竊ニ懇願企望奉リ候古
語ニモ徳ヲ輝シ兵ヲ輝サハルヲ先王ノ美德ト
仕リ又裴晉公ノ處置宜ヲ得テ能ク其心ヲ服ス
トカ申格言モ之アレバ是等ノ處へ御注目アラ
セラレ王政復古曠世ノ業御大成ナサレ候様仕
リ度臣慶邦微衷御諒察偏ニ希望奉リ候若シ然

續今體名家文抄卷之一
十

昔日ノ日本ハ諸藩ノ向背ニ於テ大關係アレドモ人民ノ服不服ニ於テ更ニ痛痒ヲ十サズ今日ノ日本ハ往々人民ノ服不服ニ於テ問ハサル可カラサル形勢アリ是世文明ニ進ミ民權ノ興マノ中ニ擴張スルモノアレバナリ賀

續今醫經家抄卷之一
 ラズシテ一旦赫怒萬民ハ服不服ヲモ問ハズ躁急御追討ト申事ニテハ諸藩ハ向背モ計リガクク海内分裂群雄割據慶元以前ニ十倍スルハ大亂ヲ醸シ加之外夷其衅ヲ窺ヒ皇國古今未曾有ハ事變ヲ生ジ却テ轉福為禍ト申モハニテ千萬計ハ得タル者ニ非ザルナリ臣慶邦竊ニ痛心恐惶仕リ候不肖ノ淺見非論極メテ御採用ニモ相成リ間敷トハ覺悟仕リ候へ共是ノ如ク御成運ノ機會ニ默止仕リ候テハ却テ不忠ノ筋ニモ相當リ申ス可ク越俎ヲ顧ミズ謹テ建言仕リ候臣

慶邦誠恐誠恐頓首謹言二月某日仙臺中將

○大總督府ニ上ル書 勝 安 芳

悚懼戰栗昧死而ノ言上ス臣義邦ノ微名圖ラズ大總督殿下ノ上聽ニ達シ江府鎮撫ノ義御委任仰セ出ダサレ且昨今ノ時勢ニ付苦慮盡カ仕リ候段御感賞之アリ猶此上忌諱ヲ憚ラズ陳述候旨深厚之寵命恐懼ニ堪ヘズ候元來臣義邦無才無能唯一點之愚衷心ヲ欺カザルヲ以テ平生ノ素心ト仕リ候然ルニ今般 御指令ノ趣身ニ取リ候テ纖芥成シ得候事切ノ覺モ之レナク實以

公ニシテ不才タレバ天下才子ナカレベシ公ニシテ無能ナレバ天下能者ナカルベシ

謙ニ似テ却
テ偶英雄實
ニ測ス可カラ
サルナリ

文章之妙
辭令之妙

テ存モ寄ラザル事。令旨ヲ奉ジ恰モ夢中又夢境
ニ入ル如ク恍トシテ報答致ス可キ所ヲ知ラズ。
且又仰ヤ付ラレ候職事ノ如キハ。臣義邦不肖敢
テ其大任ニ當リ申スベキ器量之レナク候。然ニ
猥リニ恩榮ヲ貪リ候テハ。上朝廷ヲ欺キ奉リ。下
民望ニ背キ候筋。何分拜任ニ堪ヘ申サズ恐レ入
リ候。抑。昨天兵東降ノ際。城地獻納ノ日ニ至ル
マ。デ。晏然鎮靜仕リ候ハ。中々臣義邦等ガ苦慮盡
カ。ハ。及ブ所ニアラズ。偏ニ皇威ノ赫々タルト寡
君慶喜至恭至順誠心ノ致ス所トニ職トノ是レ

由リ候實ニ慶喜一身ノミナラズ。祖宗ノ基業ヲ
捨テ全ク一家ノ私ヲ顧ミズ。幽閉待罪ノ日ト申
スト。雖トモ天朝ヲ尊奉シ。皇國治安ヲ祈ルハ意
聊惰ル所ナク。義邦輩ニ於テモ。其誠意ニ感ジ。鄙
心頓ニ消盡仕リ。只管慶喜ノ純忠ニ體認仕リ候。
尤府下寧靖。天兵臨城ノ日。市肆變ゼズ。衆庶皇恩
時雨ノ如キヲ感載仕リ候事ハ。一二聖化ノ普キ
ニヨル所ト雖モ。亦慶喜恪謹恭順ノ微功之レナ
シトモ申シガタシ。臣義邦愚昧。往日慶喜將ニ
天譴ヲ蒙ルノ時死ヲ以テ匡救仕ルベキ處微力

讀前體召家故以卷之一
十二

辭強筆亦勁

其功ヲ奏セズ。遂ニ六師征討ヲ勞シ。一時邦内
騷擾。尚ホ不測ノ變故モ候ハシ。其末外國覬覦ノ
端ヲモ開キ申ス可ニ立至候段。萬死償ヒガタシ。
追念茲ニ及候得バ。慚懼身ヲ容ル。ノ地ナシ。如
何ゾ大總督殿下ノ恩命ニ報ズル堪ヘンヤ。負罪
ノ臣今更一言ヲ奉獻ノ地位ニ之レナク候得共。
今日拜見仕リ候ニ。芻蕘ノ言ヲモ捨テザル御旨
モ之レアリ候間。忌諱ヲ憚ラズ。愚衷陳啓仕リ候。
誠ニ府下靜謐遠ク邊境及シ。生靈ノ安寧ヲ謀ラ
ント欲セバ。臣義邦輩ノ微力及ブ所ニ非ズ。前段

筆々慶喜ノ
為ニ回護人
臣ノ言此ノ
如キナラズ
安ゾ能ク人
ヲ感動スル
ニ足ランヤ

陳述仕リ候如ク。恭順至誠。士民ヲシテ。自ラ感化
セシムル。慶喜近日ノ行實コソ。能ク其地位ニ適
當仕リ候歟ト存ジ候。仰ギ願クハ。聖徳天地ニ均
シキ皇恕ヲ以テ。慶喜ヲシテ退隱仰ヤ付ラレ。府
内ニ還住ナサシメラレ候ハシ。府下ノ衆庶必ズ
其恪恭ニ薰陶セラレ。令セズンテ安靖ニ至候ハ
シ。尤負罪ノ慶喜。遜國ノ間モ之レナク。府内へ還
サセ候儀。朝廷ノ御威光ニモ拘リ申ス可キ議論
モ之レアル可ク候得共。假令惡人ニ候トモ。悔悟
改心仕リ候得ハ。咄嗟間ニ善人ニ相ヒ成リ申候

讀入禮部家文必卷之一 十三

事ニ候況ンヤ慶喜元ト惡入ト申ニモ之レナク
一時過錯馭下ハ方ヲ失シ候ヨリ天怒ヲ犯シ
奉リ以來痛責自艾仕候實蹟ハ明マ了々ニ候然
レバ今日ノ慶喜ハ前日ノ慶喜ニハ非ラズ方今
國家多難ノ際破格ノ御權道ヲ以一トツノ御仁術
ヲ施サヤラレ候ハゞ無用ヲ以テ有用ヲ助ケ皇
化ノ萬一ニモ裨補ナシト云フベカラズ斯ク纒
々置カザレバ偏ニ慶喜ノ為ニ地ヲ為シ候様御
嫌疑ノ免レザル所ニ候得共臣義邦素ト一事不
欺ヲ以テ世ニ處シ候平生ハ持操ハ大總督殿下

及ビ元戎軍門從征一二ハ吏臣ニモ粗存知ハ人
モ之レアリ候ハシカ至愚至懇ノ情意御洞察下
サレ度誠恐誠懼死罪死罪敬テ白_ス戊辰閏四月勝
安房守

〇〇再ビ大總督府へ上ル書

勝 安 考

負罪之小臣毎々 尊威ヲ冒瀆シ恐懼少ナカラ
ズ存ジ候ヘ共既ニ忌諱ナク獻言仕ル可ク令旨
ヲモ蒙リ居候ニ付泣血上言仕リ候過日仰セ出
サレ候朝裁中玉石俱ニ焚ク 御趣意ニ之レナ

臣ヲシテ其
君ヲ討クシ
ノ子ヲシテ
其父ヲ斬
シメ弟ヲミ
テ其兄ニ敵
セシメ是ヲ
名ケテ勤王
ト云ヒ盡忠
ト稱ス豈吐
々怪事ノ甚
キモノナラズ
ヤ

キ段御旨令之レアリ實ニ神武不殺ノ王師誠
ニアリガタキ聖慮ト感佩仕候然ル處今般御追
討トシテ御東下ノ節徳川家譜代恩顧之大名旗
本等只管朝命ヲ遵奉シ既ニ先鋒ト成リ罷下候
者共御褒賞ヲ蒙リ候ヤニ拜承仕リ候軍機ハ上
然ルベキ儀トハ萬々恐察致シ候ハ共其中或ハ
其心底唯利是視歴世渥恩ノ主家ニ背キ人倫ハ
綱常ヲ失ヒ候輩モ之レアルベシ若シ果テ然ラ
ンニハ如何ゾ皇國ノ為ニ忠誠ヲ抽ヅ可キヤ
寡君慶喜恭順ノ實効相立寛典ノ御旨令仰モ出

般頑民云々
先ヅ我心ヲ
獲タリト云
フベシ

サレ候日王政維新ノ際徳川祖宗以來歴代君
臣ノ義理ヲ守リ主家ト存亡ヲ共ニ仕リ度存心
ノ者共ハ般頑民ト同日ノ論ニテ其情實憐べ
キ者之レアリ此輩天下ニ在テハ頑民ニ之レア
ル可ケレ共徳川氏ハ為ニハ忠臣トモ申スベキ
者ニテ既ニ其主家ニ忠アル上ハ他日皇國ハ為
ニ忠勤ヲ抽ンズ可キニ相違之レナク候是等ノ
情狀并ニ仰セ出サレ候御趣意等厚ク御深考成
シ下サレ格別ノ皇慈ヲ以テ此輩召上ラレ
候知行所御差返シ候ハバ天地覆戴ノ聖恩千萬

讀入禮召家次少卷之一

東照神君
功徳ヲ説ク
ト欲シ先ヅ
天家・成衰
ヲ説キ慶喜
公ノ忠謹ヲ
説ント欲シ
先ヅ其ノ不
孝不義ヲ説
ク意匠經營
文章家ノ神
髓ヲ得タリ
ト云フベシ
豈獨リ其ノ

歳之下感戴仕ルベク存候。死罪々々謹言。閏四月
勝安房守。

○◎天皇陛下ニ上ル書 津田真道

掛マクモ長コキ我天皇皇帝陛下明神ト大ハ洲
國シロシメス事天地ト共ニ窮リ無シト雖モ中
世以來臨御其道ヲ失ヒ國亂相尋ギ皇威萎蕪振
ハズ大權遂ニ武門ニ移リ降りテ足利氏ノ季ニ
至リテ壞亂極マリ天下後天皇陛下ハ尊キヲ知
ル者無シ時ニ我東照宮天賜ノ智勇ニ資リ風ニ
櫛ケヅリ雨ニ沐シ備サニ百戰ハ艱苦ヲ嘗メ亂

至誠惻怛神
人ヲ感動セ
シムノミナラ
シヤ勝公大
總督府ニ上
ル書ト併セ
見レバ徳川
氏人ナシト云
フト雖モ吾
之ヲ信ゼザル
ナリ

ヲ撥ヒ正ニ反シ遂ニ皇威ノ陵夷ヲ扶ケ蒼生ノ
塗炭ヲ救ヒ能ク天下ノ候伯ヲ統御シ海内復タ
寧靜風波揚ガラザル事殆ド今ニ三百年其功豈
大ナラズヤ其徳豈盛ニナラズヤ然レバ則我ガ
神州政權ハ徳川氏ニ歸スルヤ真ニ天授ナリ人
與ナリ豈天皇ノ私ニ賜フ所ナランヤ豈將軍ハ
私ニ取ル所ナランヤ然ルニ我寡君前大將軍公
一朝祖宗傳承ハ軍職ヲ辭シ政權ヲ朝廷ニ歸セ
ラレタルハ抑何ハ心ヅヤ祖宗在天ハ靈ニ對シ
不孝トヤ云ハシ不義トヤ云ハシ蓋シ是レ我徳

讀入禮名家
十六

川氏ハ將士八萬人各疑惑シテ、辨解スル能ハザ
ル所ナリ、我請フ、試ニ之ヲ、辨解セ、抑東照公ノ
天下ヲ治平スルヤ、頗ル意ヲ文學ニ留メラレタ
リト雖モ、文教猶ホ未タ甚明ナラズ、公ノ令孫、水
戸源義公、大ニ文學ヲ脩メ、大日本史ヲ撰ベリ、我
國ノ春秋ト謂フベシ、爾來大義名分、大ニ國中ニ
明ナルニ至レリ、夫レ天ニ二日無ク、地ニ二王無
シ、我國鎌倉以還ノ形勢、天皇ノ下ニ將軍アリ、專
ラ國政ヲ執リ、大權ヲ握ル、恰モ國ニ二王アルガ
如ク、人ニ二頭アルガ如ク、甚體裁ヲナサザル事

ニテ、國體宜キヲ得ザルナリ、況ヤ、近來外國交際
ハ道漸ク、開ケ、西洋ハ文學、東方ハ名教ト和シ、世
界ハ文教、將ニ合シテ、一トナラントスルハ、秋來
ハルニ於テ、ヤ、此時ニ方リテ、人ニ二頭アル如
キ、國ニ二王アル國體、永ク我日本國內ニ存ズベ
カラズ、但此義吾儕凡人ノ得テ知ル所ニ非ズ、獨
我寡君前大將軍公ノ慧眼能ク是ヲ洞視セラレ
、ノミ、故ニ一旦斷然トシテ、祖宗以來天授相傳
ノ政權ヲ朝廷ニ歸サレタルハ、蓋シ是レ他無シ、
我神州ヲシテ唯一王土、一頭ノ國トナシ、永久治

續今昔物語卷之十一

辨得テ透徹

安ヲ保チ海外ノ強國ト、駢立セン事ヲ欲セラレ
タルナリ。是レ我寡君前大將軍公ノ至正至公、一
毫ノ私無キ磯貴島ノ大倭心ニシテ、帝孝明天皇、
皇帝陛下ニ對シテ、忠義ハ心尤深キハミナラズ、
抑又我皇國億萬ハ蒼生ニ對シテ、深仁厚澤千歲
比倫無シト謂フベシ。然レバ、則我徳川氏ノ祖宗
ニ對シテモ、孝且義ト謂フ可キハミ。抑上古天孫
降臨ノ日、當時大八洲ノ國主出雲ノ大神奉命恭
順、此國ヲ舉テ、是ヲ天孫ニ讓レリ。余ヲ以テ之
ヲ觀レバ、今日寡君政權奉還ノ功業、遠ク大國主

何等好引証

怨ムルガ如
シ誦フルガ
如シ

何等好引証

ニ踰ユト言フト雖モ、敢テ過言ニ非ズ、然ルニ彼
ハ千歲天子ノ禮享ヲ辱ウシ、此ハ從臣ノ異議先
駢ノ争鬪等ヨリシテ、方今猶如冲ニマシマス。今
上、皇帝陛下ハ逆鱗ニ觸レ、遂ニ征討六師東下ス
ルニ至ハリ、此時ニ方リテ、彼建御名方ナカマ神明カミ訪ノ
類ノ如キ者、極メテ少カラズ、或ハ云フ東兵直ニ
西上シテ、遙ニ承久ノ故智ヲ襲ント。或ハ云フ、暫
ク之ヲ駿遠ノ間ニ防ギ、軍艦ヲ以テ直ニ其巢窟
ヲ突カント。議論頗ル紛然、死ヲ以テ寡君ヲ犯ス
者少カラズ。然ルニ寡君平生ハ素心尊王ハ誠意

續今昔物語卷之十一

辭々巧妙

確乎トシテ變ゼズ、泰然トシテ動カズ、富士ハ嶺
ハ磐根ヨリモ堅シ、憂國ハ情益厚ク、伊勢ハ海ハ
底ヨリモ深シ、獨リ國亂ハ因テ以テ增長セン事
ヲ恐レ、又外侮ハ其釁隙ニ乘ゼン事ヲ患ヒ、竊ニ
蘭相如ノ心ヲ師トシ、愈滋恪謹恭順、屢説諭ヲ下
シ、王師ニ抗スル者ハ、又ヲ我身ニ推スニ同ジ
ト云ヘリ、是ニ於テ、關東ノ根本タル江戸ノ城ヲ
闕キ、海陸軍士ノ精神タル銃艦ヲ獻ジ、水戸ノ僻
邑ニ退去シ、伏テ天裁ヲ待ツニ至レリ、嗚呼其用
心ハ深遠ニシテ、且苦シキ何ゾ、某ハ此ハ如ク甚

何等好引証

何等滿慨

何等痛心

シキヤ、但憾ヲカハ、王師武甕雷經津主ハ神兵ニ
非ズ、臣ヲシテ君ニ敵シ、末家ヲシテ本家ヲ征シ、
弟ヲシテ兄ヲ伐タシム、倫理綱常顛倒滅裂、其レ
是ヲ何トカ言ハシ、嗚呼文教ハ威ナル、近時ハ如
ク、名義ハ明ナル、目今ハ如何、殊更王政復古、紀綱
一新ハ際ニアタリ、此不可思議ノ舉アリ、怪々奇
々、殆ト將ニ口ヲ開キテ言フ可キ所ヲ知ラズ、然
リト雖モ、我輩天地間誠ニ忍バ可カラザル所ヲ
忍ビ、却テ恐懼戰慄恭肅謹慎スルモ、他無シ、是
ハ竊ニ我寡君恭順憂國ハ大倭心ニ體シ、誓テ國

讀入禮名... 十九

續々體名家文抄卷之一

字々照應

ハ為ニ家ヲ忘レ、公義ハ為ニ私利ヲ去ルモ、ニ
テ、日夜昊天ニ號泣シ、明神ニ哀願スルモ、ハハ寡
君ハ至誠至忠、速ニ天地ニ貫徹シ、神明ヲ感格シ、
明神ト大八洲國シロシハカム、天皇皇帝陛下ハ
寵恩天賞ヲ辱セン、事ハ冀望スト、云フ、慶應四年
閏四月、津田真道泣血百拜謹言。

○蝦夷地ヲ乞ヒ、德川舊家臣ヲ撫育セン
乞フ書

榎本武揚

德川脱籍ノ微臣恐懼ヲ顧ミズ、懊惱悲歎ノ餘リ、

如何セン四
字一篇命根

昧死奏聞仕リ候、抑臣等一同此地ニ罷リ越シ候
趣旨ハ、當夏、主家德川ノ御處置ニ付、家臣末々迄
凍餒之レナキ様遊バサル可キ趣旨ノ趣拜承仕
リタ、皇帝陛下無量ノ御仁德凡ソ有生ノ類誰カ
感戴仕ラザランヤ、如何セン、德川家ハ、二百餘年
養來リ候者共三十有餘萬、賜封ノ七十萬石ヲ以
テ、相養ヒガタク、去トテ聊カ士道相守候者、今更
商賈ト伍ヲ為ス能ハズ、假令窮餓死ニ抵リ候共、
三河已來ノ士風ヲ汚ス可カラズト決心、險難ヲ
經、萬死ヲ骨ニ、東西ニ遁逃致レ候者、又ハ江戸附

續々體名家文抄卷之一 二十

續今體名錄

近ノ地へ、潜居致シ居候者實ニ枚擧スベカラズ、
右ノ者共ヲ鎖撫仕リ終古不閑ノ蝦夷地ニ移住
仕ラセ、慕奉ヲ開拓シ、永久皇國為無益ノ人ヲ以
テ、有益ノ業ヲ為シメントノ微旨ナリ、即チ舊主
龜之助ヨリ、其旨歎願仕リ候處、乍チ允准ヲ蒙ル
能ハザルノ詔ヲ下セリ、然ルニ右ハ素ヨリ野心
等之レアリテ歎願仕リ候義ニ之レナキ耳ナラ
ズ、前文幾千萬ノ人數、處分之レナキニ付、右ノ者
共ノ中ニ就キ、十一ノ一二ヲ船中ニ移シ、其ノ妄動
ヲ禁ジ、品川沖ニ謹ミ置カセ、夫ヨリ仙臺表迄、著

一請入フシ
テ泣カント
歎セシム

一東往

仕リ候處、折節與羽御平定ニ相成候ニ付、春巳來
同藩脱走ノ者共、今ハ天地ノ間ニ身ヲ容ルノ地
ナキニ付、同船仕ラセ、夫ヨリ吾輩後來ノ情實、逐
一四條卿へ建言仕リ候通り、蝦夷地ニ涉リ、沍寒
風雪ヲ厭ハズ、眼前一身ハ凍餒ヲ凌ギ、後來北門
ハ警護ヲ勤メ、シタメ、同志ハ者共、去ル十月中、驚
ハ木へ、著艦仕リ候條、天神地祇、毫モ虚偽之レナ
シ、其段既ニ清水谷待從へ申立當地ニ於テ、御指
揮相々待テ候處、圖ラズモ、賊徒ノ惡名ヲ蒙リ、不
意ニ夜襲ニ及バン、忽チ戰爭ト變ジ候、豈其ハ本

續今體名錄

意ナランヤ、然ニ夜襲後清水谷、始メ箱館諸役々
ニ至ル迄、残ラズ此地ヲ立去リ、市民動揺一ナラ
ズ、殊ニ外國互市場ニモ之レアリ、故ニ吾輩假ニ
法則相ヒ立テ候、其時柘前ノ地方隨テ動揺致シ
候ニ付、吾輩來意ノ趣、再三使ヲ遣シ陳述候處、却
テ我使者ヲ殺害シ、事數人ニ及ビ、其上彼ヨリ發
砲攻撃ニ及ビ、遂ニ柘前ヲ棄テ、脱走仕候間、是亦
土地守衛仕リ、今日ハ函館柘前共、一圓平定農商
業ヲ安ジ、人心歸依仕リ候ニ付、自己ニ山野開拓
ノ仕法取調ベ、北門警護ノ順序相計リ候、何卒

蝦夷地一圓永ク舊主家ニ下シ賜リ候儀、御許
容相成候様、幾重ニモ、獻裁ヲ仰ギ奉リ候、猶陳
述仕リ候ハ、吾輩所謂三千一心矢テ、佗ナシト、雖
モ、主長之レナク候テハ、手足頭目ナキガ、如ク、閑
拓警護完全致シガ、タク候間、徳川血統ノ者、一人
御撰任諸務差配致シ候様仕リ度、左候ハ、心一層、
感激奮發仕リ、不毛ハ僻地富饒ハ郷トナリ、北門
ハ警護金湯ハ固メテ為シ、内地ハ利益興ス可ク、
外寇ハ防禦嚴ナル可ク、實ニ目今一大事ハ急務
ト存ジ候、當春已來不幸ニシテ、皇國內戰爭相續

試ニ當年此
乞ヲ許セバ
今日千島交
換ノ事相ヒ
ナカルベシ
如何

此一段始メ
夏ホ、ハ、ハ、ハ

ト稱スベシ
今日西復
此ノ兄弟
藩ノ事ヲ
邦國ノ形勢
實ニ痛心ニ
任ヘザルナリ

キ萬民ノ塗炭見聞ニ恐ビザルハミナラズ勝敗
ハ際一喜一憂之レアリ候氏所謂兄弟鬩牆畢竟
皇國ノ衰弊他人ノ笑ヲ免レザル段ハ一同痛心
罷在候間元ヨリ戰爭ハ相ヒ好マハ候ヘ氏著岸
以來度々奮戰仕リ候儀事實已ヲ得ザルハ情實
天監ヲ冀ヒ候此程英佛兩國軍艦函館へ入港船
將へ會話仕リ候處御國地ノ戰爭相歎キ調停ノ
方便モ之レアル哉ニ申シ聞ケ候間微臣等抑塞
窮惋ノ誠情天聽ニ達スベキ時至リ候哉ト歡
喜ニ堪ヘズ船將ニ相託シ兩國公使へモ申シ入

余今春墨隄
ニ遊ビ詩アリ
云ク弦歌色
津墨江天花
外樓臺花下
船不首西陸
兄與弟干戈
決戰血吹烟
録以テ江湖
同感ノ人ニ
告グ

大前條奏聞仕リ候是即チ一ハ皇國ノ為ニ德
川ノ為吾輩丹心石腸相盡ニ相守ル處ニ候皇慈
偏ニ御垂憐アリ願意御聞届相成リ候様泣血歎
願仕リ候昧死百拜

○朝典ヲ改メ外人ノ參内ヲ允サントテ乞ノ
書

松平慶永

續今體名家文抄卷之
讀入而豐名家文抄
二十三

論大ニシテ
意正奏議ノ
體ヲ得タリ

臣等謹テ按ジ候ニ、古ノ能ク、天下ヲ定メ候者ハ、
必ズ先天下ノ大勢ヲ視テ、緩急機ニ從ヒ、處置宜
キヲ得候。故ニ功徳ノ一時ニ光被スルノミナラ
ズ、萬世不拔ノ業。是ニ於テ相立候。今ヤ皇上始テ
大統ヲ繼セ賜ヒ、御政權又一ニ歸シ、凡百ノ宿弊、

山内 豐信
毛利 元敏
島津 忠義
淺野 茂長
細川 謹久

更始一新シ、天下萬姓、目ヲ拭ヒ、治ヲ望ノ秋也。即
在朝ノ百官自ラ奮發シ、内皇上ノ御徳化ヲ輔ケ、
外皇威ヲ萬國ニ偃ベ、臣子ノ分ヲ盡サン事ヲ欲
ス。就中今日ノ急務ハ、皇國ト外國トノ交際ヲ
講明セズンテ、叶ハザル儀ニ存ジ候。近頃 朝廷
始テ外國事務ノ官職ヲ設ケラレ、其人ヲ撰舉サ
レ、專ラカヲ盡サレ候ハ、天下ノ人ヲシテ、方向ス
ル所ヲ知ラシメ、タマハント欲スル深意ニシテ、
皇威ヲ萬國ニ赫耀セシメ候ハ、此時ニ之レアル
可ク存ジ候。然ルニ古語ニモ、人心ハ同ジカラザ

奴隸視スル
 所ノ武臣遂
 ニ改權ヲ取
 リ禽獸視ス
 ル所ノ夷狄
 遂ニ國都ヲ
 蹂躪ス和漢
 古今尊大自
 賢者其樂一
 轍

ル其面ハ如シト申シ候テ、在上在下ハ人未ダ各
 一區々ハ議ヲ執テ疑念ナキ事能ハズ、又或ハ漢
 土人ハ如ク自ラ尊大ニシテ、外國人ヲ禽獸ノ如
 ク蔑視セシカ、凡終ニハ彼ニ打負ケ却テ驅使セ
 ラレ候様ニ成行候覆徹ヲ踐ムニ至ルベキカト
 甚憂慮仕候、依テ熟考仕候處、今日ノ先務ハ上下
 協力一和シ、宇内ノ形勢ヲ審ニシ、皇國ノ一方ニ
 孤立シ、世界ノ事情ニ違セズ、只偷安維レ計リ、荏
 苒衰退遂ニ彼ガ為ニ制セラレベキ勢ニ至ルト
 外國ノ他邦ニ航行シ、衆善ヲ包テ取り、氣運日々

我邦開化
 漸次却步故
 ニ國力亦隨
 テ退縮神功
 皇太后成國
 ニ對シテ誰

ニ開ケ、政治文明、兵食充備、橫行敵ヲキトニ較シ、
 一々相計バ、盛衰ノ原由モ判然相分リ申ス可キ
 ヤニ存ジ候、固ヨリ、躰懲ノ重典モ之レナクテハ
 叶ハザル儀ニハ候ヘ共、控叩ノ術、其方ヲ得候ヘ
 バ、遠人ヲ懷キ候道理ニテ、尤無罪ノ人ヲ躰懲致
 シ候譯ニハ之レナシ、中古朝廷ニモ、玄蕃ノ官ヲ
 置セ賜ヒ、鴻臚館ヲ建サセ、ラレ候テ、遠人ヲ綏服
 成サレ候事モ相見ヘ、其後天正慶長ノ間ニハ、蠻
 夷共屢、西國ニ渡來交易シ候、若シ其來港致サレ
 ル節ハ、大將軍ヨリ、書簡ヲ遣シ、之ヲ催促シ、猶ホ

續入禮部
 二十五

カ扼腕切蹙
ヲ為テザル
者アラシヤ

遲緩ニ及ブ時ハ此方ヨリ大軍ヲ發シ攻撃ニ及
ブベキナゾト申越シ候儀モ之レアリ候處島原
ノ一亂以後幕府始テ鎖國ノ令ヲ出シ候然シナ
ガラ漢土和蘭ニ於テハ猶交易差シ免シ候ハバ
一切外國人ハ攘ヒ斥ルト申譯ニハ更ニ之レナ
シ近來攘夷ノ論盛ニ起リ諸侯ノ内偶攘斥致シ
候モ之レアリ候ヘ共素ヨリ一國ノカヲ以テ為
ス可カラザルハ論ヲ待タズ且先年幕府ヨリ十
年ヲ期シテ成功ヲ奏シ申ス可キ杯申上ルハ陽
ニ其名ヲ假リ陰ニ其私ヲ行ヒ候詐術ニテ先帝

彼取ルベキ
モノ甚多ク
我補ハハレ
可カラザル
モノ亦甚ク
少ナカゾ
是國カ振ハ
ザル所以ニ
シテ保護稅
以テ起ル所
以

日夜御苦慮遊バサレ候御儀ト也。同年論ニ之
レナク存ジ候然レバ今日皇國ハ衰運ヲ挽回シ
重威ヲ海外ニ輝シ奉リ候儀ハ一カ兩斷ハ朝裁
ヲ以テ井蛙管見ノ僻論ヲ去リ在廷樞要ハ大臣
ヨリ其所見ヲ改メ上下同心交際ハ道開カセラ
レ彼ガ長ヲ取リ我が短ヲ補ヒ萬世ハ大基礎ヲ
相据ラレ候様之レアリ度候仰ギ願クハ。皇上
モ亦御英斷以能ク天下ノ大勢ヲ觀察シ是ハ六犬
羊戎狄ト相唱ヘ候愚論ヲ去リ漢土ト齊シク視
セラルルヲナク朝典ヲ一定シ萬國普通ノ公法

古今體名家文抄卷之一

ヲ以テ、參朝ヲモ命ゼラレ、其旨海内へ布告シテ、
永ク億兆ノ人民ヲシテ、方向ヲ知ラシメ、クマハ
シテ、懇願ノ至リニ任ヘズ、某年二月某日、越前宰
相、土佐前少將、長門少將、薩摩少將、安藝少將、細川
右京大夫、等誠恐誠惶頓首頓首。

○華士族平民ノ族ヲ立シテ論ズル議

福岡 孝悌
板垣 退助
封建ヨリ、郡縣ニ移ルノ際ニ於テ、已ヲ得ズ、門閥
ヲ存ス、故ニ人民中、族稱ヲ分テ、華族トシ、士族ト

巴ム可キ
ヲ以テ、巴
ム
可カラズト
ス余未ダ其

ノ何ノ時カ
巴ムヲ得ル
ヲ知ラサルナ
リ

ス、ト雖、氏、務テ平均ハ理ヲ執ルベシ、更ニ大
ニ、其區域ヲ殊ニスバ、カヲズ、依テ華士族ノ族
ノ字ヲ稱シ、率平民族ノ字ヲ稱セザルハ、是レ則
區域ヲ殊ニスルノ大端ト相ヒ成リ、後來ノ目的
如何ヤト存ジ候、舊來農ヲ百姓ト云ヒ、工ヲ職人
ト云ヒ、商ヲ町人ト云フ、皆一定ノ族類トス、向後
農工商ハ、人民ノ活計業ト成リ、其族類ハ總テ平
民ト稱スベシレバ、則亦一族稱ニ相違之レナカ
ルベシ、必シモ格祿世襲ノ者ニ限り、族稱ヲ立ル
ト成難シ、然ニ率ハ一代ノ者ヲ指シテ云ヘバ、向

古今體名家文抄卷之一

續命帝名家文抄卷之一

後其族稱ヲ立ベカラズ、更ニ卒ノ一類ヲ除ク可
ナリ、若シ卒ノ一類ヲ除クベキ、評議相立候ハ、
左ノ三類ト相成リ然ルベキカ、一ニ曰ク、華族、二
ニ曰ク、士族、三ニ曰ク、平民、門閥ヲ存スルノ第一
ヲ以テ、華族トスト雖氏、向後官ニ就ク者、門閥ヲ
論ゼズ、族類ニ限ラズ、唯有位ノ者ト、無位ノ者ト
ヲ以テ、人民中ノ段別ヲ立ツベキ、華族亦常
職トシ、華士平民各其位ノ者ノ下ニ就クベキ儀、
一般タルベシ、向後ノ目的ヲ立ルニ於テ、恐ラク
ハ、斯ノ如クナラザルヲ得ズ、士族常職ヲ解キ、其

天機伺職
アリ故ヲ携
ヘ花ヲ看ミ
月ヲ弄スル

職アリ未ダ
必ラズ常職
ナレト云フバ
カラズ

禄ヲ家産ニ變ゼシムルハ、全國一般ノ人民ヲシ
テ、競起センコトヲ要トス、俄ニ士族ヲ墮シ、從來ノ
農高ニ均シカラシムルニ非ルナリ、世ニ平禄、歸
農、廢刀ノ三説アリ、恐ラクハ、皆然ルベカラズ、士
族ノ禄ハ、其祖孫世襲ノ高下固有ノ儘ヲ以テ、今
日家産ノ基ヲ関クナリ、更ニ平均ヲ論ゼズ、天下
ノ貧富ヲ均セント欲スルニ同ジカルベシ、農工
商ハ一般人民ノ活業ニ歸ス、士族常職ヲ解キ、其
禄ヲ家産トセバ、更ニ強テ歸農セシムベカラズ、
廢刀ハ天下ノ政治リ、人民擁護ハ道ヲ得バ、人々

昔日ノ日本
國人ニシテ

續命帝名家文抄卷之一
三十八

廢刀論旨
識絶見
フベシ然ル
ニ一旦廢カ
令ヲ出シ今
日復拔刀隊
ヲ作ル政府
意旨深遠音
如ト稱スベ
シ

刀ヲ廢スルモ可ナラン。今日猶刀劔ヲ以テ護身ノ具トス。護身ハ人民同般タラン。且平民稱氏ヲ許サル、人上ハ帶刀モ亦許サルベシ。門閥族類ニ依テ帶刀ノ域ヲ立ベカラズ。總テ帶刀ハ、人民ノ勝手タルベクト相成リ然ルベキカ。然ニ卒ノ一類ヲ除クト、帶刀人民ノ勝手タルベキトノ兩條ハ、今般高知藩奉伺候廉々施行ノ上ハ、尤關係仕リ候間、若シ評議モ相立候ハ、發令程仰ギ奉リ候。庚午十一月高知藩權大參事板垣退助、同大參事福岡四位、誠恐頓首敬白。

均祿
歸農
歸商
祿券
國債

主意

○國債証書ヲ作り華士族ノ祿ヲ廢セン
論ズルノ議
方今天下ハ大勢、既ニ一ニ歸スト、雖モ唯其名アツテ、其實未ダ舉ラザル。所以ハ、天下ハ會計未ダ一ニ歸セザレバナリ。財利其道ヲ得ザレバナリ。財利ハ道他ナシ。其要冗費ヲ去テ、實用ニ適スルハ、此頃諸藩專ラ斯ニ注意シ、常職ヲ解キ、世祿ヲ廢シ、上下均祿ノ說アリ。農商ニ般セシムル者アリ、四民ヲ同一ニシテ祿券ヲ製シ、買賣ヲ許スアリ。世祿ヲ視テ國債トナス論アリ。其四

讀入禮召家文以卷之一
二十九

一筆先ッ其
卓見ヲ贊賞
シ以下條々
其非ヲ辨論
ス抑揚與奪
ノ法ヲ得タ
リト云ベシ

民ノ同一ニ歸セシムル如キハ、最モ千古ノ卓見
ト云フベキカ、其上下均祿々券ヲ製スル等ニ至
テハ、或ハ未ダ可ナラザランカ、何トナレバ、均祿
ハ下等ノモノ甚ダ困厄、且物ニ差等アルハ、天地
自然ノ公理ナリ、而ノ今是レヲ均一ニセント期
ス、却テ公平ト云フ可カラズ、天下無數ノ士ヲシ
テ農ニ歸セシムル時ハ、又幾萬頃ノ田畝ヲ與ヘ
ザルヲ得ズ、今其田、豈ニ之レアランヤ、山林荒野
開墾ノ如キハ、固ヨリ世農ノ者猶ホ之レヲ難ン
ズ、況ヤ三百年來安逸ノ士、一旦力耕ニ服スルヲ

難問ヲ以テ
本意ヲ迫リ
出ス妙

得ルモノアランヤ、今日士トナリ、明日商トナリ
能ク活計ヲ立ル者ノ如キモ、亦實ニ幾許カアル
祿券ノ如キ、年々其祿ヲ與フルニ至テハ、唯賣買
ヲ許セシノスニテ、聊、世祿ニ異ナラズ、更ニ其本
ヲ固フスルニ似タリ、此ニ由テ之レヲ觀レバ、蓋
シ皆非ナランカ、然則常職解カズ、世祿廢セズ、ハ
テ可ナルカ、曰ク、不可、常職ヲ解キ世祿ヲ廢シ、各
其所ヲ得セシメント欲セバ、大政府ニ於テ、國債
證書ヲ制スルニ若クナシ、夫國債證書ナルモノ
ハ、政府信ヲ下ニ立ツ所以ニシテ、國內萬民ト利

讀
續
體
名
家
文
抄
卷
之
一
三十五

維新體裁

害ヲ共ニシ、下自ラ上ニ親附シ、相共ニ政府ヲ擁護維持セザルヲ得ズ。其法既ニ西洋各國ニ昭著タリ、故ニ斷然夫ノ華士族ノ常職ヲ解キ、世祿ヲ廢シ、現今ノ祿三ケ年、乃至五ケ年分ヲ一時ニ與ヘンニ、先ヅ代金ニ積リ、凡若干ト定メ、之ヲ國債ト視做シ、一人毎ニ其數ノ證券ヲ分與シ、毎歲何分ノ利息ヲ收ムルヲ得セシメ、之ヲ以テ生活ノ基トナサシム。其私便ヲ以テ、證券ヲ嚮カント欲スルモノ、或ハ半數正金ヲ得ント欲スルモノハ、之ヲ許可ス、而メ後六十四州ノ租稅ヲ舉テ、之レ

議論文章双
絶ト稱スベ
シ千古卓見
佗人ニ非ズ
シテハ公ニ
リ大隈公全
國一致ノ議
ト雄ヲ示フ
ニシ

ヲ大藏省ニ輸入シ、半ヲ以テ利金ニ充ツ、半ヲ以テ償却ノ法ヲ立ツ。十年ヲ出ズンテ、悉ク其證券ヲ消盡スベシ。華士族モ、亦各其資産ヲ以テ漸次家計ヲ立レバ、一夫モ其處ヲ得ザルナキ者ナリ。誠ニ此ハ如ニシテ、天下ノ財政ハ、一々大藏ニ皈シ、一國ニ一政廳ヲ置キ、一道ニ一鎮臺ヲ置キ、募兵徵發ヲ始メ、總テ法ノ如クナラザルナシ。是ニ於テカ、名實共ニ舉ダ、始テ海外萬里ト並立スルヲ得ンカ、某年某月臣茂昭謹白ス。

○大藏理財修整ノ為米利堅ニ航行センヲ

讀、禮、儀、文、武、三十一

續今體名義抄卷之一

乞フ書

伊藤博文

臣伏テ推ルニ、方今國運煥發英敏特達ノ士彬々輩出開化ハ進歩駸々乎前日ハ比ニアラズ然リ而ノ治國ノ要務亦隨テ增益シ、忙官劇職或ハ寢食ノ暇ナキニ至ル、臣因テ之ヲ推思スルニ、其要枚舉ニ違アラズト雖凡、理財會計ノ修整ヲ以テ、度政ノ根軸トス、夫理財會計ハ、凡ソ事務ノ舉行ニ關涉ス、故ニ其方法施設ノ可否ニ從テ、利害得失全國ノ民庶ニ垂及ス、其緊務タル固ヨリ言ヲ

確言

方今我邦ノ會計最モ憂慮ニ足ルモノアリ之ヲ讀テ愴然

俟タズ、抑國家ノ興廢ハ、萬民ノ貧富ニアリ、而メ萬民貧富ハ、實ニ財政ノ當否ニ依ル、是豈ニ深ク關心セザルヲ得可シヤ、方今霸政專擅ノ餘弊猶未ダ全ク洗除セズ、就中金銀貨幣ノ位價紊亂シ、物價ノ低昂頗ル紛離ヲ究メ、其禍害全國ニ及シ、民庶生ヲ聊セザルニ至ル、加之無根ノ紙幣ハ、八千有萬兩天下ニ散在流布シ、又更ニ贗摸ノ弊害ヲ生ズ、極救ノ方策殆ト將ニ如何スベカラザルニ至ラントス、是ニ於テカ、朝廷英邁ノ神斷ヲ以テ、新貨幣鑄造ノ工ヲ興シ、亦紙幣改定ノ議ヲ決

讀入體名義抄卷之一

續今體名家文抄卷之一

セラレ、其貨位ヲ糾定シ、物價ノ平準ヲ得セシメ、其製造ヲ精緻ニシテ、贗摸ノ奸偽ヲ遏止スルニ至ントス。是乃チ今日ノ急務ニシテ、實ニ國家危安隆替ノ關涉スル所ナリ。臣無似ト雖、職ニ此ニ從事ス。故ニ夙夜匪勉、以テ其効ヲ奏シ、永ク萬民ノ幸福ヲ保存シ、以テ皇徳ヲ不朽ニ傳ントス。是臣ガ焦思苦心深ク、今日ニ希望スル所ナリ。然ニ才拙ニシテ、事大且方、法規畫ハ如キ、獨リ紙上ハ理論ヲ以テ臆斷スベカラズ、故ニ或ハ之ヲ書籍ニ考覈シ、或ハ是ヲ實際ニ徵シ、以テ其功驗ヲ

余常ニ公ノ才巧ニシテ拙ナラザルヲ恨ム

監シ、然ル後初テ可否得喪ハ理判然タルヲ得タリ。臣頃日合衆國國債償却法、及ビ紙幣條制等ノ書ヲ繙閱シ、其方法ヲ視ルニ事理適實、官民共ニ其權利ヲ保存シ、相行ハレテ相悖ラズ、維持約束實ニ明亮精確ニシテ、最モ準據トナスベシ。然ニ一班見テ以テ全體ヲ妄案スベカラズ、故ニ之ヲ實境ニ驗シ、而シテ其真理ヲ採擇シ、以テ我邦今日ニ用ウルト有ントス。冀クハ臣ニ數月ハ暇ヲ賜ヒ、合衆國ニ抵リ、凡理財ニ關スル諸法則、國債紙幣及ビ為替貿易貨幣鑄造ハ諸件ニ至ル迄、面視

續今體名家文抄卷之一

親聽更ニ推考參酌シテ確然不拔ハ制ヲ設立セシメ聊隆恩ハ萬一ニ報シ開明ノ裨補タルヲ得セシムン下ラ臣悃歎ノ至ニ堪ズ誠恐頓首庚午十月廿八日大藏少輔臣伊藤博文

○辭職ヲ請フノ表 陸 奥 宗 光

謹テ白ス當今 皇威四海ニ輝キ新政ヲ敷キ人オ拔擢ノ典ヲ設ケ諸國ノ武士及ビ農民各材カニ應ジ分際ヲ論セズ御撰用相成リ候ハ野遺賢ナキノ美事最上ノ御政令四海一同感戴仕リ候然ルニ宗光年少ハ書生圖ラズ御撰擢ヲ蒙ル外

野ニ遺賢ナキハ國ノ幸福ニ非ラズ余友中島某其論アリ宜

ク取テ見ルベシ

國事務權判事ノ重職ニ加ヘラル深重ハ皇恩山嶽猶低ク蒼海猶淺シ士ハ光榮何ヲ以テ之ニ如ハヤ然ラバ粉骨碎身以テ皇恩萬分ノ一ニ報ス可キ儀ニ候へ共不才ノ微身ヲ省ミ候處孔子漆雕閑ヲシテ仕ヘシムルニ未ダ之ヲ信ズル能ハザル訓モ之ハ下リ且外國交際ハ四方ニ使シテ君命ヲ辱メザル名士ノ職掌其實無クシテ其任ヲ汚シ候儀恐惶慙愧ノ至ニ堪ヘズ候最モ人撰ハ政務ノ根本古今ノ難事加之ノミナラズ源頼朝以來武家掌握大政務一旦皇威ニ依テ再ビ朝

當今上下一人此ノ語ハ深奥ヲ知ルモノナシ故ニ朝廷ニ輕薄才子ノ淵藪タルヲ免レズ

亦名言稱
スベシ

延ニ復シ後醍醐天皇萬々御憂苦ノ叡慮ニモ貫
徹シ空前絶後盛世如何ハ庸劣僥倖ヲ以テ重任
ニ當ルベケンヤ最當今賢哲在位才能在職固ヨ
リ撰舉御缺闕之レナシト雖モ千百中或ハ一二
誤テ撰舉ニ應ジ候者之レナシト云フ可カラズ
非器在職ノ害ハ遺賢在野ノ害無キニ如カズ一
進一退ノ間利害得失少々ノ事ニ之レナク宗光
ガ如キ短才微劣僥倖ノ魁タル者自カラ朝典ヲ
辱シメ明鏡ノ塵點トモ相成候テハ重々恐縮仕
リ候過日伊達少將殿ニ謁シ辭職願入仕候へ共

御採用之レナキ由因テ再願仕候願クハ一片赤
心深ク御憐察ヲ垂レ解職御許容之アリ度恐惶
謹言慶應四年四月陸奥宗光頓首再拜

○官費生徒ヲ廢スルハ國家ノ文運ニ害アル

ヲ論ズルノ書

福澤諭吉

起句鄭重
人ノ二字元
モ其妙ヲ覺
ス

芝金杉川口町二十三番地町人福澤諭吉申シ上
ケ候此度文部省ヨリ御達シ以來私塾ノ生徒へ
公費差出シ候儀ハ一切廢止致スベク但シ東南
兩校へ稽古願出候者ハ試験ノ上入學差シ許サ
ル條拜承仕リ候私儀ハ兼テ三田二丁目ニ於テ

是政府相當ノ論說福澤先生ノ真意ニアラザルベシ

地處拜借私塾建築生徒モ凡三百名入塾イタシ
居リ候此度右御達ニ付塾中取調候處府縣ノ公
費ヲ以テ入學ノ者過半之レアリ以來公費御廢
止相成リ候テハ今日ヨリ差支候ハ申込之レ
ナク甚鋪ハ故郷へ歸路ノ費モ御坐ナク難澁此
上ナキ次第勿論兩校へ罷出試驗ノ上ハ入學モ
御差許相成リ可キ趣ニハ候得共元來生徒ハ試
驗ハ讀書ハ巧拙而已ヲ以テ足ルベキニアラズ
讀書ハ可ナリ出來候者ニテモ行狀宜シカラザ
ル者ハ結局國家ハ用ニ適スベキ者ニアラズ學

此ノ時余亦逐客中ニアリ文部ニ向テ其非ヲ論ズ大抵先生ト同意

業ハ進步ハ速ナラザルモ誠實ニ勉強シ行々ハ
見込之レアル人物モ少ナカラズ其邊ノ吟味遠
ニ一日一席ハ試驗ヲ以テ迎モ詳ニ致スベキ儀
ニハ之レナク加之始テ讀書ニ就キ僅ニ半年カ
一年ハ者ハ學業試驗致スベキ方便モ之レナク
迎其人物ハ良否ヲ問ハズ此迄修業ノ年月ニモ
拘テズ唯今日ハ有リ様ヲ試驗イタシ其學業未
塾ナリトテ之ヲ放逐致スベキ理モ之レアル間
鋪且又官ノ學校ト云ヒ私立ノ學校ト云フモ唯
其相違ハ教師ハ官員ニ列スルト否ザルトニテ

教授ハ法ハ大同小異。詰リ日本國內ハ生徒ヲ導
 キ文學ヲ開キ候儀此迄トテ諸方ハ私塾ヨリ人
 物ハ出候儀ハ少ナカラズ。然ルニ今私塾ノ生徒
 ニノミ公費御差留トアリテハ現在文學ノ一路
 ヲ塞ギ候次第ニハ相成マシキヤ。右ノ次第ニ付
 私方塾生ノ儀ハ兩校試験ノ御趣意ヲ奉伺シ例
 ニ倣ヒ私ニテ試験仕リ其次第ニ依リ見込ノ者
 ヘハ公費御渡シ相成リ候様仕度私方塾生ノミ
 ニ候得バ朝夕親シク教授ヲ致シ候ニ付大抵人
 物ノ良否モ相分リ居リ且又學業ノ試験ハ此迄

公校ノ人物
 ヲ出ス私塾
 ノ多キニ如
 カズ是古今
 ノ實事

毛春秋兩度取行ヒ候仕来ニテ即當三月其期月
 ニ候間此亦詳ニ生徒ハ甲乙ヲ定メ申可シ或
 ハ私共ハ試験不行キ届之儀モ之レアルニ付文
 部省御立合モ下サレ候ハ此上ハ儀ニ
 候免ニ角天下ニ文學ノ洽カラルルハ國家ハ一
 大欠典官私ヲ問ハズ全國内ニ數千百ハ學校ヲ
 建築致シ度ハ固ヨリ私共ハ志願而已ナラバ恐
 ナカラ政府ニテモ其趣意ト奉察候。抗柄此度御
 達ノ趣何分ニモ疑惑仕候ニ付忌諱ヲ憚カラズ
 此段奉願候以上福澤諭吉

續命骨名新編 卷之一

◎◎鹿兒島縣令大山綱良ニ答ル文

西郷隆盛

古今無雙
英雄余其
文ヲ評ス未
ダ其人ヲ評
スベカラズ

拜復、迫田隆藏外一名、運輸來船ノ次第、領承致シ候。陳ハ頃來數次ノ激戰、臺兵殆シド、其度ヲ失ヒ、既ニ籠城ハ策ヲ決シ、敢テ出テ戰ハズ。因テ昨今吉次、木留、田原、阪等ハ諸險ヲ扼シ、東軍ハ進入ハ拒ギ、熊本ト相連絡スルヲ得ガラズ。此田肥筑我兵ニ應ズル者甚ダ多ク、軍門真ニ填塞ス。所謂地利、人和、兩ナガラ得ルモハカ、桐野、篠原、村田等非常ノ勉勵、只今吉次ノ方、六七分切リ、拔キ、東軍

古語引キ得
テ宛モ好シ

抗險ノ字洗

敗走ノ報アリ、此ノ勢ニ乘ゼバ、今日中ニハ、木留、田原、阪モ、擊退クヘシ、諸險全ク我有ニ相屬セバ、一夫險ニ據リ、萬人進ム能ハザルモ、ニシテ、東軍縱令ヒ、百萬ノ貴冑アリトモ、亦復タ戰勢ヲ挽、回シ、進入ハ期ナカルベシ。左レバ、熊本ハ戰ハズシテ、屈服スベシ。熊本落城相成リ候ヘバ、營ニ我兵ハ根據確立スルハ、シナラズ、各縣風靡、諸國蜂起シ、九州ハ先ツ平定スベシ。故ニ此處勝敗、此度ハ大關係ニ候。征討總督ノ令、回リ來リ、一覽致シ候。刺客事件ハ、全ク撲滅シ、堂々名義ヲ以テ討罰

籠城ノ字洗

千古疑案

續命骨名新編 卷之一 三十八

然一段尤
其ノ英雄氣
象ヲ見ル
其語太謙
其氣太豪

奸臣ノ心胸、惡ムベキノ至リト云ベシ。最早事勢
モ、此ニ至リ候テハ、更ニ言語口舌ヲ以テ、是非曲
直ヲ争ヒ、難ケレバ、腕カハ外之レナカルベシ。然
シ、天下ノ事ハ、成敗利鈍ヲ以テ相判ジ候譯ニハ
之。ナク、小生ハ正ヲ以テ起リ、正ヲ以テ斃レ、
始ヨリノ目的ニ候。華聖頓那破倫湯武云々ハ、中
々小生輩ノ事ニ非ズ、萬一不幸相破レ、屍ヲ原野
ニ露ラシ、藤原廣嗣等ト其品評ヲ同クスルモ、足
利尊氏ノ成ルヲ望マザルナリ。二位老公ハ如何
若シ相謁セバ、此ハ意ヲ致セ、時下不順為國自愛

余曾テ和聖
頓ヲ詠テ云
ク、經叔休論
名與義、奇男
而後有奇勳
誰圖陀日大
統領、即是當
年救將軍、公
ノ此文ヲ讀
ニ及シテ、聊
カ感ズル所
アリ録以後
ノ君子ヲ俟
ツ

セヨ、三月十二日、隆盛再拜。

○征討總督二品親王有栖川親仁ニ上リ博愛
社設立ヲ乞フ書

大給 恆
佐野 常民

傍觀ニ忍ビ
ザルモノ出
獨リ兩君ノ
ミナラシヤ

此度鹿兒島縣暴徒御征討ノ義ハ實ニ容易ナラ
ザル事件ニテ、開戦已來、既ニ四旬ヲ過ギ、攻撃日
夜ヲ分タズ、官兵ノ死傷、頗ル夥多ナル趣、戦地ノ
形勢逐次傳聞致シ候處、悲慘ノ狀、誠ニ傍觀スル
ニ忍ビザル次第ニ候。抑モ死者ハ深ク憐レハ、バ
シト、雖氏、生ニ復スル法ナシ、唯ダ傷者ハ痛苦萬
狀、生死ノ間ニ出沒スルヲ以テ、百方救濟ノ道ヲ
盡ス、ト必要ト存ゼラレ候。固ヨリ政府ニ於テハ、
看護醫治ノ方法整備スト雖、連日ノ激戦創痍
ノ者、漸ク増シ、自然御行届、相成リ兼候場合モ、之

此慰問ノ如
キハ日本皇
帝ニシテ美
事日本帝后
ニシテ美談
此社ノ如キ
モ日本官吏
ニシテ美譽
ト稱スベシ

レアルベシト料察致シ候。聖上至仁、大ニ宸襟ヲ
惱シ玉ヒ、屢々慰問ノ使ヲ差セラレ、皇后、宮、亦厚
ク賜フ所アリタル由、臣子タル者、豈ニ感泣ハシ
ニ、止、ハ、ヤ、就テハ吾輩此際ニ臨ミ、數世國恩ニ
浴シ候。萬分ノ一ヲ報ゼン為メ、不才ヲ顧ミズ、一
社ヲ結ビテ、博愛ト名ケ、廣ク天下ニ告ゲテ、有志
者ノ協參ヲ乞ヒ、社員ヲ戦地ニ差シ、海陸軍醫、長
官ノ指揮ヲ奉ジテ、官兵ノ傷者ヲ救濟致シ度、志
願ニ之レアリ候。且又暴徒ハ死傷ハ、官兵ニ倍ス
ルハ、ハ、ハ、ナ、ラ、ズ、救護ハ方法モ、相ヒ整ハルハ、言ハ

涙痕滿紙之
ヲ見テ泣カ

我同胞兄弟
ニ非ズ

歐米ノ戰ハ
常ニ外患ニ
在リ故ニ事
往々此ノ如
シ我邦ノ如

ハ多クハ内
亂ニアリ此
事甚ク行ナ
レザル勢ア
リ故ニ曰ク
感化云々亦
以テ國家文
明ノ點ヲ知
ルベシ

俟タズ、往々傷者ヲ山野ニ委シ、雨露ニ暴シテ、收
ムル能ハザル哉ハ由、此輩ハ如キ大義ヲ誤リ、玉
師ニ敵スト、雖氏亦皇國ハ人民タリ、皇家ハ赤子
タリ、負傷坐シテ死ヲ待ツ者モ捨テ、顧ミザルハ
人情ハ忍ビザル所ニ付、是亦ク收養救治致シ度
御許可之レ、アリ候ハ、朝廷寛仁ハ御趣意内外
ニ赫著スルハ、ミナラズ、感化スルハ一端トモ相
ヒ成リ、候、歐米文明ノ國ハ、戦争アル毎ニ、自國人
ハ勿論、他邦ヨリモ、或ハ金ヲ贖シ、或ハ物ヲ贈リ、
若クハ人ヲ差シ、彼是ノ別ナク、救済ヲ為ス、甚

ダ勤ムルノ慣習ニテ、其例ハ枚舉ニ暇アラズ候。
本件ノ義ハ、一日ハ遅速モ、幾多ハ人命ニ于シ、即
決急施ヲ要シ候ニ付、何卒丹誠ハ微意、御明察至
急御指令下カレ度、仍テ別紙社則一通相添シ、此
段願ヒ奉リ候也。明治十年五月、議官佐野常民、大
給恆、頓首謹言。

◎◎

原漢文

秦西人上
書ニ擬ス

中村 正直

是等ノ大手
筆其ノ閑闊
變化段落過
渡ノ法ヲ見
ルベシ王陽
明佛骨ヲ諫
ムル書ト同
巧ニシテ異
曲

外臣毎相語
日ク云々彩
色アリ景情
アリ

續全書卷之十一

某頓首再拜。謹テ日本皇帝陛下ニ稟ス。外臣險ヲ
遠洋ニ履ミ、來テ貴國ニ寓シ。頗ル風俗ヲ諳ジ。大
ニ事情ニ熟ス。伏テ惟フニ貴國人民陋ニ安ジ。故
ニ泥ム。ノ習ナク。善ニ遷リ。過ヲ改ル。ハ風アリ。加
フル。陛下ハ寛心衆ヲ御シ。虛懷物ヲ容レ。亦善必
ズ。取リ。彼我ヲ論ゼズ。一長必ス收メ。中外ヲ問フ。
莫キヲ以テ。文藝ハ。則彬々。日ニ盛ン。智巧ハ。則駁
々。日ニ進ム。外臣毎ニ相ヒ。語テ。曰ク。大日本頗ル
歐羅巴ノ氣像アリ。東洋諸國能ク及バ。莫キナリ。
故ハ以テ。外臣貴境ニ來ルモ。ハ。大ニ將來ニ期望

然而ノ一抗

シ。目ヲ拭テ。其ノ為ス。所ヲ觀ガ。ルモ。ノ莫シ。然リ。
而メ。外臣竊ニ陛下ノ為ニ惜ム。所ノモノアリ。若
シ。披陳ヲ容ルサバ。請フ腹心ヲ布カシ。夫レ法ハ。
時ニ隨テ變ジ。政ハ勢ニ由テ改ル。是ノ故ニ陛下
即位ノ始メヨリ。大ニ新政ヲ布キ。丕ニ故法ヲ變
ズ。要スルニ時勢ノ然ラ使ムルニ因ル。固ヨリ事
切ヲ好ムノ為ス。所ニ非ズ。集議院ヲ開ケバ。則巴
力門ノ規制ニ彷彿シ。而メ。人民政ニ與ルノ漸ア
リ。文部省ヲ設ケバ。則西士ヲ延テ教師ト為シ。而
メ。人材長養ノ望アリ。邊凡書信館ノ法ニ倣ヒ。而

而ノ二字一
々其ノ委曲
曲盡ノ妙ヲ
見ルベシ

續全書卷之十一 四十二

新編 皇朝 文獻 卷之十一

ノ驛官始テ置キ、西國工匠ノ人ヲ招キ、而ノ火車
電信次第工ヲ開ク。書生ヲ許シ、西國ニ留學セシ
メバ、則支給千萬金ノ費。而ノ惜マス。外洋商ヲ許
シ、開港場ニ住セシメバ、則一切其ノ自由ニ任セ
而ノ問ハズ。凡此等新政新法、外國ハ善ヲ取リ、他
邦ハ長ヲ收ムルニ非ザルモ、ハ莫シ、陛下寛大ハ
量ト人民自新ハ心アルニ非ルヨリハ、何ヲ以テ
此ニ臻ラン。是レ實ニ外臣ノ稱賛シテ、巴マザル
所ナリ。然リ而メ、獨リ曉ラザルモ、ハアリ、何ヲ以
テ異教ハ禁今ニ至テ、未ダ除カザルカ、陛下將ニ

然リ而メ一
折問難改懸
支氣カアリ

光敏アリ、鐵
刺ノ對決場
ヲ觀ル如シ
愉々快々

曰ントス、此レ國禁ナリト。然ラハ、則陛下何ゾニ
十年前大日本ノ景象ヲ以テ、反觀シテ、内省セザ
ルヤ。外國ヲ待セバ、則唐蘭ヲ除クノ外、通信互市
ヲ禁ジ、長崎ヲ除クノ外、洋船入港ヲ禁ジ、内地ノ
民ヲ馭セバ、則其ノ大船ヲ造リ、遠洋ヲ駕スルヲ
禁ジ、醫者ヲ除クノ外、蟹文ヲ識リ、西籍ヲ讀ムヲ
禁ズ、凡此レ皆國禁ニ非ズヤ。然リ而メ、此等國禁
ハ如キ、次第廢撤、今復タ存スルモ、ハナシ。豈ニ此
等苛酷ハ諸禁、昔時ニ行ハル可クシテ、今日ニ行
テ、可カラザルカ。豈ニ人智、開明ニ進シ、而メ、政法

然リ而メ一
折

續 皇朝 文獻 卷之十一 四十三

堂々學士未
其ノ正邪
ヲ辨ズル能
ハズ陛下安
ゾ能ク其邪
正ヲ知ラン
只其ノ邪ナ
リト云爾ス
ルニ

寛大ニ趨クハ效ニ非ズヤ、獨リ怪ハ、教法ニ至テ
ハ、則頑然尚ホ二百年前陳腐ノ國禁ヲ株守シ、目
スルニ、邪教ヲ以テシ、冥然覺ラズ、牢ト破ル可カ
ラ、ガハ、抑モ何ノ故ゾヤ、陛下則將ニ曰ハン
トス、唯其ノ邪ナリ、故ニ禁ゼガハル可カラズト、然
ラハ、則陛下何ニ由テ、其ノ果テ邪ナルヲ知ルヤ、
凡ソ物試ミガレバ、則知ル能ハズ、貴國嘗テ西國
ヲ目スルニ、夷狄ノ名ヲ以テスルナラズヤ、試ミ
ニ之ト交通スルニ、及ンデ、始テ其ノ果テ、夷狄ナ
ラザルヲ知ル、而シテ膺懲ノ論息ム、西國船艦銃礮

則ノ字其妻
曲々盡ノ妙
ヲ見ルベシ

ノ精巧ニ驚ケバ、則既ニ試テ之ヲ用ウ、火車電信
ノ迅速ヲ喜ベハ、既ニ試テ之ヲ用ウ、試ニ洋服ヲ
著ケ、其便利ヲ知レバ、則衆庶相ヒ率テ、以テ俗ヲ
ナス、試ニ頭髮ヲ散ジ、其ノ愉快ヲ覺ユレバ、則朝
野相學デ以テ風ヲナス、試ニ雙劍ヲ脱シ、其ノ輕
便ヲ喜ベバ、則士人ノ相ヒ仿フモノ、紛ト其レ道
ニ載ツ、試ニ洋饌ヲ嘗メ、其ノ滋味ヲ愛セバ、則牛
羊ノ肉爭テ樽俎ノ間ニ列ヌ、凡ソ此ハ皆貴國ハ
試ムル所ニシテ、其善ヲ知リ、善ヲ知テ、能ク遷ル
モ、ハナリ、然ルニ此等究ニ西國ノ糟粕ニ過ザル

其善ヲ知リ
善ヲ知テ能
遷云々項針
回環法ヲ用

ウレ似タリ

大段落

水盡山起ル
富強元ト教
法ノ本意ニ
非ズ然ルニ
説ヲ時君ニ
勸ムルモノ
此ノ如クナ
ラザルベカラ
ズ

續今體名家文抄卷之一

ノ之、顧フニ其ノ精神ハ、則殆ト胡越ノ相ヒ知ラ
ザル如シ、此レ西國人ノ竊笑スル所ニシテ、外臣
ノ陛下ノ為ニ惜ム所ナリ、陛下其レ亦西國ノ富
強ナル所以ヲ知ラシカ、夫レ富強ノ原ハ、國仁人
勇士ノ多キニ由ル、而ノ仁人勇士ノ多ク出ル所以
ノモノハ、教法ノ信心望心愛心ニ由ルニ非ルモ
莫シ、西國教法ヲ以テ精神トナシ、此ヲ以テ治
化ノ源トナス、獨リ此ハハニ匪ハナリ、妙絶ノ技
藝精巧ノ器械ニ至テハ、創造者アリ、修改者アリ、
其ノ勤勉忍耐ノ大勢力、一ニ教法ノ信望愛三徳

教法三徳曰
信曰望曰愛
信トハ上帝
ノ必スアル
ヲ信ズルナ
リ望トハ未
來天堂ニ生
ズルヲ望ム
ナリ愛トハ
我同人類ヲ
始メ天地萬
物ヲ愛スル
ナリ
惑ルナリ一
下ヲ起ス
以上正説以
下反説
一節一節ヨ
リ急其喉ヲ

ニ根モザルモノ莫シ、蓋シ今日西國ノ景象ハ、教
法ノ華葉外茂スルモノニ過ギズ、而メ教法ハ實
ニ西國ノ本根内托スルモノナリ、今貴國其ノ技
葉ノ美ヲ喜ビ、盡ク之ヲ已レニ得ント欲シ、百方
試學猿猴ノ為ス如キニ愧ジズ、而メ顧テ其ノ由
ル所ノ本根ヲ遺ル、其レモ亦惑ルナリ、夫レ心志
邪ナレバ、則言行邪、本根邪ナレバ、則枝葉邪、陛下
若シ西國教法ヲ以テ邪トナスカ、西國ハ邪國ナ
リ、西國ノ仁人勇士モ亦邪ナリ、妙絶ノ技藝精巧
ノ器械モ、亦邪ナリ、勤勉忍耐ノ大勢力、亦邪ナリ、

讀入禮名家文抄卷之一 四十五

扼シテ其背
ヲ打ツ如シ
讀者ヲシテ
悚動仄慙セ
シム不知天
皇陛下以テ
何等ノ感觸
ヲナスヤ

此、如クナレバ、則陛下閣ク所ハ議院ハ規則ハ
邪規制ナリ、延ク所ハ教師ハ、邪教師ナリ、招ク所
ハ工人ハ、邪工ナリ、許住開港場ハ、洋商ハ、邪商ナ
リ、電信、火車、漁船、凡ハ利便ハ具、皆邪物ナリ、何ゾ
盡ク、邪物ヲ燒滅シ、邪教師ヲ放逐シ、邪商ヲ誅戮
シ、邪規制ヲ廢毀セザルヤ、推シテ之ヲ論ゼ、バ、則
洋服、洋饌、散髮、脱刀、ナルモ、ハ、邪國ハ風俗ナリ、
何ゾ、明ニ嚴令ヲ出シ、痛ク之ヲ禁絶セザルヤ、夫
レ、教邪ニシテ、人邪ナラザルモ、ハ、決シテ是レナ
キナリ、人邪ニシテ、國邪ナラザルモ、決シテ是レ

高歎公孫座
謂ッテ曰梁
王君ノ言ヲ
用キ我ヲ用
ウル能ハズ
安ガ能ク君
ノ言ヲ用キ
我ヲ害セル
ヤト余曰ク
我邦西教ヲ
用ウル能ハ
ズ安ガ能ク
西教ヲ驅リ
教師ヲ逐フ
ヲ得ンヤ

大段落

ナキナリ、堂々正教ハ、貴國、邪國ト通信、邪人ト通
商、而シテ、獨リ、邪教ヲ禁ズ、甚ダ謂レ、ナキナリ、曷ゾ
和約ヲ絶チ、互市ヲ止メ、二十年前ハ、大日本ハ、景
象ニ復スルハ、愈リタルニ、若レヤ、曷ゾ、六師ヲ興
シ、三軍ニ令シ、邪國ヲ剿滅シ、本ヲ拔キ、源ヲ塞ギ、
貴國正氣ヲメ、宇宙ニ塞滿セ、使ムハ、愈リタルニ、
若レヤ、是ヲ之レ為セズ、而シテ、他國ハ、糟粕ヲ好レ、
デ、其ハ、精神ヲ惡シ、首鼠兩端進退據ルナシ、外臣
甚ダ陛下ノ為ニ取ラザルナリ、夫レ西國治化ノ
美ヲ慕ヒ、文藝ノ善ヲ喜ビ、機器ノ巧ニ驚キ、盡ク

續今體名家抄卷之一

之ヲ已レニ得レト欲セバ、則宜ク勺々ニシテ汲
ミ、支々ニシテ求ムベカラズ、必ス當ニ斯ニ臻ル
所以ノ本源ヲ探ルベシ、苟モ其ノ本源ヲ得バ、則
支流求メズシテ自カラ有セシ、西國治家ノ美文
藝ノ美、機器ノ巧、貴國ノ艷慕スル所ノモノ、皆末
流ナリ、西國ノ教法、貴國ノ嫌惡スル所ノモノ、其
ノ本源ナリ、今貴國其末流ヲ喜ビ、而シテ其ノ本源
ヲ惡ム、惑ヘリ。謂フベシ、乃チ不學無術ノ過ナ
リ。且陛下東洋諸國ノ西人ヲ、輕蔑スル所トナル
所以ヲ知ルカ、陛下將ニ曰ハレトス、國貧且弱ナ

上段惑ルナ
リニ應テ一
枚罵テ不學
無術トナス
亦甚シ人主
ニ告ル體ニ
非ズ然ルニ

是レ白壁ノ
微瑕

且字ヲ以テ
一進

愛スル所ト
ナルベシ弄
スル所トナ
ル可カラズ
畏ル所トナ
ル可シ惡ム
所トナルベ

ル故ナリト、外臣ハ則以テ然リト為サズ、西國人
民篤ク教法ヲ信ジ、深ク骨髓ヲ淪ス、東洋人意想
ハ及ブ所ニ非ズ、教徒遍ク遠洋ニ往キ、務テ教法
ヲ弘メ、艱難ヲ避ケズ、死生ヲ顧ミズ、故ニ凡ソ西
國人民、他邦ノ洋教ヲ惡ムモノヲ見ル、心其愚ヲ
憫ムト、雖モ、而シテ亦輕侮ノ意アルヲ免レズ、外之
ト相ヒ交ルト雖モ、而シテ自カラ疎隔ハ情アルヲ
免レズ、今貴國西國教法ヲ惡ム、支那ヨリ甚シ、西
人ハ愛スル所トナランヤ、西人ハ惡ム所トナラ
ンヤ、西人ハ重ズル所トナルカ、西人ハ輕ンズル

續今體名家抄卷之一 四十七

カラス

然リト雖
一轉漏ラサ

所トナルカ。陛下蓋グ自カラ察セザル。然リト雖
 モ。昔時貴國ノ西教ヲ惡ム。蓋シ言フ可キモノア
 リ。當時士班葡萄牙歐洲中強國ト稱シ。法教ヲ借
 テ。吞噬ノ助ト為ス。羅馬法王法教ノ權ヲ擅ニス。
 稍其ノ説ヲ同ウセザルモノハ。威ヲ以テ。之ヲ脅
 迫ス。英國ノ如キ久ク其軛ニ苦ミ。後漸クニシテ
 脱スルヲ得。此ノ時教徒ノ日本ニ至ルモノ。志行
 虔誠佗志アルニ非ズト雖モ。但二國ノ王意測ル
 可カラザルモノアリ。故ニ豊太閣頗ル之ヲ疑フ。
 浮屠氏因テ之ニ乗ジテ。讒毀百出。其ノ邪教ノ名

不載遺憾

抑字又轉

西國人農夫
 兵卒猶木皆
 宗教ヲ奉ヤ
 我日本ノ如
 キハ官吏ト
 雖モ一入宗
 教ヲ奉ズル
 モノナシ文
 野ノ懸隔自
 カラ千萬里
 ラナス所以
 カ

ヲ得ル所以職トメ是ニ之レ由ル。抑今日ノ西國
 ハ。二百年前ノ西國ニ非ズ。決テ此ノ如キ惡弊ア
 ルナシ。教法各種ノ宗門。人民自ラ擇グニ任セテ。
 國王與カラズ。理學家詩人文士工藝人。法教ハ
 信心アラザルモ。ハ莫シ。農夫兵卒婦人小兒禮拜
 ノ儀ヲ行ハザルモ。ハ莫シ。者者法教國王ハ器具
 タリ。今ハ法教家々人々ノ精神タリ。仁人身ヲ志
 レ。多ク善事ヲ行ヒ。勇士生ヲ捨テ。以テ邦國ヲ守
 ル。今日ノ開化日新。誰カ法教ハ然ラ使ム所ニ非
 ズト謂ハンヤ。善樹善果ヲ結グ。今日ノ開化日新

正意盡ル処
比論ヲ出シ
比論了ル処
正意ヲ出ス
大文章體
宜ク此ノ如ク
ナルヘシ

ハ果ナリ。教法ハ樹ナリ。陛下若シ西國ノ果ヲ以
テ、善トナスカ、則請フ其ノ樹、善ニ疑フナキナ
リ。陛下徒ニ務テ、西國ノ遺果ヲ拾テ、其ノ餘甘ヲ
嘗メ、而メ其樹ヲ移植シ、自ラ善果ヲ結ビ、纍々絶
エガラ使ムルヲ知ラズ、豈ニ西人ハ姍笑スル所
ト。為ラザランヤ。陛下若シ西教ノ禁ヲ除カザレ
バ、則貴國汲々歐州ノ治化技藝ヲ學ブト雖モ、決
テ真正歐州ノ治化技藝ニ進ム能ハズ。譬バ木偶
人ノ如シ。面目手足具ルト雖モ、而メ精神ハ則失
フ。何ゾ活人ト對峙シテ平行ノ禮ヲ用キンヤ。陛

若シ果テ一
轉氣魄アリ

欣々相語曰
ハン一句首
段外臣每相
語曰ノ句ニ
應ジ情景アリ

下如シ。果テ西教ヲ立ント欲セバ、則宜ク先ヅ自
ラ洗禮ヲ受ケ、自ラ教會ノ主トナリ、而メ億兆ハ
唱率トナラン。若シ果テ斷然此ヲ行ハバ、則今ヨ
リ以後西國君主ハ陛下ヲ敬愛スルモ、如何ソ
ヤ。西國人民ハ陛下ヲ祝福スルモ、如何ゾヤ。當
ニ欣々然相語テ曰ハン。亞細亞概ネ上帝道理ヲ
知ラズ、而メ日本獨リ之ヲ重ンズ、豈ニ東方ハ歐
羅巴ニ非ズヤ。日本亞細亞第一富強ハ國タル。豈
ニ目ヲ刮テ待ツ可カラザランヤ。ト稱賛ハ聲天
上ニ達シ、嘆美ハ談地極ニ遍シ。陛下何ヲ顧テ焉

大東收

外臣猶然况
ヤ内國人民
ヲヤ

ヲ為サハル。此外臣ノ反覆陛下ノ為ニ惜ム。所以
ナリ。外臣久ク貴國ニ在リ。貴國ノ西人ハ陽疏輕
賤スル所トナルヲ視ルニ忍ビズ。又實ニ貴國ハ
真正ハ開化日新ニ進ミ。富強ハ邦トナリ。萬國ト
對峙セシトヲ欲ス。故ニ區々ハ衷ヲ陳シ。以テ陛
下ノ為ニ獻ズ。陛下幸ニ照覽ヲ垂レヨ。外臣某謹
言。

偶續今體名家文抄卷之一終

此編大意主
地人民ヲ以

テ全ク天子
ノ私有トナ
シ今日文明
ノ議論ト大
ニ背馳スル
ノミナラズ
此舉ノ起源
亦嘉ヌ可キ
意ハナキヲ
關ク故ニ余
ノ卷中ニ列ス
ルヲ好マズ
ニ前後ノ關係
亦欠ク可キ
ル者アルヲ以
テ今茲ニ之ヲ
補ス宜ク格平慶

偶續今體名家文抄卷之一補

◎◎版籍返上ノ表

島津忠義

毛利元敏

鍋島直大

山内豊範

臣等謹テ案ズルニ。朝廷一日モ失フ可カラザル

モ。ハ。大體ナリ。一日モ假ス可カラザル。ハ。
大權ナリ。天祖國基ヲ肇建シ。皇統一系萬世無窮。
而ハ普天率土其ハ有トナラザルナシ。亦其ハ臣

永等朝改
革善後在
ルベシ
是日亦民權
剥奪始カ

朝廷自致
スナリ

トナラガルトハシ。是ヲ大體トナス。且ツ與ハ且ツ
奪ヒ爵祿以テ下ヲ維持シ。尺土モ私有スルヲ能
ハズ。一民モ私攘スルヲ能ハズ。是ヲ大權トナス。
在昔朝廷海内ヲ統馭ス。一ニ之ニ因ル。聖躬之ヲ
親カラス。故ニ名實並ヒ立テ。天下無事ナリ。中葉
以降網維一タビ弛ミ權ヲ弄シ。柄ヲ争フモノ踵
ヲ朝廷ニ接シ。其民ヲ私シ。其土ヲ攘ムモノ天下
ニ半バズ。遂ニ搏噬攘奪ノ勢ヒヲナシ。朝廷守ル
所ハ體氣ル所ハ權ナク。之ヲ制馭スルヲ能ハズ。
姦雄迭ニ乘ジ。弱ノ肉ハ強ノ食トナリ。其大ナル

幕府已ニ其
民ヲ私セズ
其大政ヲ返
ス是レ此義
ノ執止ヲ得
ガル出ル所
以カ

一轉體ヲ得
タリ

モノハ十數洲ヲ并セ小ナルモノ猶ホ士數千ヲ
養フ。所謂ハ幕府ノ如キモノ土地人民ヲ擅ニシ。
其私スル所ヲ頒チ以テ其勢權ヲ扶植ス。是ニ於
テカ朝廷徒ニ虚器ヲ擁ニ。其視息ヲ窺ヒ以テ喜
戚ヲ為スニ至ル。橫流ノ極滔天回ラガルモノ此
ニ六百餘年ナリ。然レ其間往々天子ノ名爵ヲ假
リ。其土地人民ヲ私スルノ跡ヲ蔽フ。是固ヨリ君
臣ノ大義。上下ノ名分。萬古不拔ノ者アルニ由ル
ナリ。方今大政新ニ復シ。萬機之ヲ親カラス。實ニ
千歲ノ一機。其名アリ。其實無ルベカラズ。其實ヲ

名命論筆
カ老泉ニ似
タリ

舉ルハ大義ヲ明ニシ、名分ヲ正スヨリ先ナルハ
莫シ、嚮キニ徳川氏ノ起ルヤ、故家舊族天下ニ半
バス、依テ家ヲ起スモノ亦多シ、而シテ其土地人民
之ヲ朝廷ニ受ルヤ、否ヲ問ハス、因襲ノ久シキ以
テ今日ニ至ル、世或ハ謂フ是レ祖先鋒鏑ヲ冒シ、
獲ル所ナリト、吁、何ゾ兵ヲ擁シテ官庫ニ入り、其
貨ヲ奪ヒ、而シテ是レ死ヲ犯シテ獲ル所ト謂フニ、
異ナランヤ、庫ニ入ルモノハ、人其賊タルヲ知ル、
土地人民ヲ攘奪スルニ至リテハ、天下之ヲ怪シ、
マズ、甚イカナ、名實ノ紊亂スルヤ、今ヤ丕新ノ治

抑一轉亦體
ヲ得タリ

ヲ求メ、大體ノ在ル所、大權ノ繫ル所、毫モ假スベ
カラザルヲ知ルベキナリ、抑モ臣等居ル所ハ、即
チ天子ノ土ニシテ、牧スル所ハ、即チ天子ノ民ナ
リ、安ンジ、私有スベケンヤ、今謹ンデ其成籍ヲ收
サメ之ヲ上ル、願クハ朝廷其宜シキニ處シ、其與
スベキハ之ヲ與ヘ、其奪フ可キハ之ヲ奪ヒ、凡ソ
列藩ノ封土更ニ宜シク詔命ヲ下シ、之ヲ改定ス
ベク、而シテ制度典型軍旅ノ政ヨリ、器械戎服ノ制
ニ至ルマデ悉ク朝廷ヨリ出テ、天下ノ事大小ト
ナク皆ナニ歸セシムベシ、然ル後チ名實相得

與奪云々一
語其素情
ヲ見ルベシ

余今日薩長
土肥人士
為之所見
ルニ是等公
明忠正
其本意ニ非
ルニ似ツリ
歐公唐ノ大
宗ノ繼因
論テ曰ク吾
上下交モ相
賊シ以テ此
名ヲ成ズラ
見ルト上ハ
知ラズ下ハ
吾其賊スル
ヲ信ズルオ

續今體名家文抄卷之一補終

テ始テ海外各國ト並立スベキナリ。是レ朝廷今
日ノ急務ニシテ、而シテ又臣子ノ責ナリ。故ニ臣
等不肖謏劣ヲ顧ミズ、敢テ鄙衷ヲ獻ズ。天日ノ明
幸ヒニ照臨ヲ賜ヘ、明治二年正月廿三日島津忠
義、毛利元敏、鍋島直大、山内豊範等頓首再拜謹白。



偶評續今體名家文抄卷之一補終

平時以迄廿四年

南陽散史

010190527943

